コリント人への手紙第一　21 回
御霊の賜物（1）
―御霊による信仰告白―
12：1〜3

はじめに

1. 文脈の確認
   - (1) 結婚に関する教え（7：1〜40）
   - (2) 偶像に献げられた肉（8：1〜11：1）
   - (3) 女のかぶり物（11：2〜16）
   - (4) 聖餐式（11：17〜34）
   - (5) 御霊の賜物（12〜14）
     - ①御霊による信仰告白（12：1〜3）
     - ②一致と多様性（12：4〜31）
     - ③愛の優位性（13：1〜13）
     - ④異言よりも預言（14：1〜25）
     - ⑤正しい賜物の行使（14：26〜40）

2. 注目すべき点
   - (1) コリント教会の礼拝に混乱をもたらした 3 つの要因
     - ①女のかぶり物
     - ②聖餐式
     - ③御霊の賜物
   - (2) 御霊の賜物が最も深刻な問題である。
     - ①これもまた「信者の自由の濫用」という問題である。
     - ②パウロは 3 章を用いてコリントの信者たちの誤りを正す。
   - (3) 12〜14 章の内容（A-B-A というパターンが見られる）
     - ①12 章―総論的な説明
     - ②13 章―神学的な挿入句
     - ③14 章―問題の是正
   - (4) この箇所（12：1〜3）の役割
     - ①御霊に支配されているかどうか（聖霊の内住）を確認する。
     - ②御霊による新生体験がないなら、それ以降の議論は意味がなくなる。

3. アウトライン

（1）新しいテーマ（1 節）
（2）信者になる前の状態（2 節）
（3）信者になった今の状態（3 節）

4. 結論：パウロの教えの予習

御霊による信仰告白について学ぶ。

Ⅰ．新しいテーマ（1 節）

1. 1 節

1Co 12:1 さて、兄弟たち。御霊の賜物については、私はあなたがたに知らずにいてほしくありません。

（1）ここから新しいテーマが始まる。
①「○○については」（ペリ・デ）
②新しいテーマは、「御霊の賜物」である。
③7：1

1Co 7:1 さて、「男が女に触れないのは良いことだ」と、あなたがたが書いてきたことについてですが、

④「御霊の賜物」もコリントの信者たちが質問してきたものである。
⑤この質問が、最も深刻で重大なものである。

（2）御霊の賜物とは
①聖霊の内住がある人に、聖霊が与える賜物である。
②ギリシア語で「ton pneumatikon」（the spirituals）である。
＊訳語では、「賜物」ということばを補足している。
③聖霊を強調する場合は、「pneumatika」を使う。
④賜物を強調する場合は、「charismata」を使う。

（3）御霊の賜物に関する教えは、コリントの信者たちに必要なものである。
①10：1（先祖の偶像礼拝の罪から学ぶ教訓）

1Co 10:1 兄弟たち。あなたがたには知らずにいてほしくありません。私たちの先祖はみな雲の下にいて、みな海を通って行きました。

②「私はあなたがたに知らずにいてほしくありません」（12：1）

（4）根底にあるのは、「霊的クリスチャンとはどのような人か」という問いである。
①ガラ 5：16

Gal 5:16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。

＊肉（自我）に従っている人は、霊的クリスチャンではない。

②悪霊に従っている人も、霊的クリスチャンではない（10：20〜21）。

③2：15

1Co 2:15 御霊を受けている人はすべてのことを判断しますが、その人自身はだれによっても判断されません。

＊御霊を受けている人は、生まれながらの人とは異なる。

④霊的クリスチャンとは、聖霊の支配のもとにある人である。

＊御霊の内住があるだけでは、霊的クリスチャンとは言えない。

Ⅱ．信者になる前の状態（2 節）

2．2 節

1Co 12:2 ご存じのとおり、あなたがたが異教徒であったときには、誘われるまま、ものを言えない偶像のところに引かれて行きました。

(1) コリントの信者の多くが、異教徒（偶像礼拝者）であった。

①彼らは、種々の偶像礼拝を通して、神秘的な体験をしていた。

②信者になってからも、過去の体験に囚われている人たちがいた。

③彼らは、神秘的な体験が、霊的であることの証拠だと思い込んでいた。

(2) 信者になる前の彼らは、誘われるまま、偶像のところに引かれて行った。

①偶像は、ものを言えない。

②しかし、その背後には悪霊がいる。

③10：20

1Co 10:20 むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。

④偶像礼拝の中で体験する預言や異言は、悪霊から出たものである。

⑤使 16：16

Act 16:16 さて、祈り場に行く途中のことであった。私たちは占いの霊につかれた若い女奴隷に出会った。この女は占いをして、主人たちに多くの利益を得させていた。

(3) パウロは、コリントの信者たちが語る預言や異言が悪霊から出ているとまでは言っていない。

①しかし彼は、聖霊から出ていない預言や異言があることを示唆している。

Ⅲ．信者になった今の状態（3 節）

3．3 節

1Co 12:3 ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも「イエスは、のろわれよ」と言うことはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。

(1) 信者になった今は、御霊の働きかどうかを見分ける必要がある。

①信者の中には、偶像礼拝の中で預言や異言を語っていた者たちがいた。

②彼らは、その体験を教会での礼拝の中に持ち込んで来ていた。

③しかし、恍惚状態で語ることが、その人の霊性を決めるわけではない。

④語られる内容が、神からのものか悪霊からのものか、判断する必要がある。

⑤大切なのは、それが恍惚状態で語られることばあるかどうかではない。

⑥大切なのは、語られる内容が正しいかどうかである。

(2) 聖霊の支配に服している人は、「イエスは、のろわれよ」とは言わない。

①「のろわれよ」は「アナテマ」である。

②アラム語の伝統がキリスト教会に持ち込まれた例である。

③アナテマには、裁きのために選び分けられ、神に献げられたという意味がある。

④「イエスは、のろわれよ」と言う人は、悪霊によって語っている。

(3) 聖霊の支配に服していなければ、「イエスは主です」と言うことはできない。

①恍惚状態であっても、自然な状態であっても、差はない。

②聖霊によらなければ、イエスに対する信仰を告白することはできない。

③聖霊の働きは、イエスをあがめることである。

（ILL）感動的な体験がないある婦人の質問

(4) これ以降の教えは、聖霊によって「イエスは主です」と言った人に向けられる。

結論：パウロの教えの予習

1．御霊の賜物が与えられている目的

(1) 信者には、最低 1 つは御霊の賜物が与えられている。

(2) その目的は、教会（信者の群れ）の必要に仕えるためである。

(3) 御霊の賜物のリストは、ロマ 12 章、エペ 4 章、1 ペテ 4：10〜11 にある。

2．御霊の賜物の多様性

(1) 御霊の賜物を複数与えられている人もいる。

(2) 同じ御霊から出ているが、御霊の賜物には多様性がある。

（3）御霊の賜物には、優劣の差はない。

3. 御霊の賜物の誤用

（1）一致をもたらすはずの御霊の賜物が、分裂の原因になっていた。

（2）御霊の賜物が霊的力の象徴となり、敵対心を駆り立てていた。

（3）自分を誇るために、華々しい御霊の賜物（異言）が重視された。

（4）教会は、優越感を持つ人と、妬みや劣等感を覚える人とに二分された。

（5）解決策は、愛に基づく御霊の賜物の行使である。

コリント人への手紙第一　22 回
御霊の賜物（2）
―一致と多様性（1）―
12：4〜14

はじめに

1. 文脈の確認
   - (1) 結婚に関する教え（7：1〜40）
   - (2) 偶像に献げられた肉（8：1〜11：1）
   - (3) 女のかぶり物（11：2〜16）
   - (4) 聖餐式（11：17〜34）
   - (5) 御霊の賜物（12〜14）
     - ①御霊による信仰告白（12：1〜3）
     - ②一致と多様性（12：4〜31）
     - ③愛の優位性（13：1〜13）
     - ④異言よりも預言（14：1〜25）
     - ⑤正しい賜物の行使（14：26〜40）

2. 注目すべき点
   - (1) コリント教会の礼拝に混乱をもたらした 3 つの要因
     - ①女のかぶり物、②聖餐式、③御霊の賜物
   - (2) 御霊の賜物が最も深刻な問題である。
     - ①パウロは、14 章で異言の問題を取り上げる。
     - ②その前に、御霊の賜物全般について解説する。
   - (3) 12〜14 章の内容（A-B-A というパターンが見られる）
     - ①12 章―総論的な説明
     - ②13 章―神学的な挿入句
     - ③14 章―問題の是正

3. アウトライン（一致と多様性）
   - (1) 一つの御霊と多様な賜物（4〜11 節）
   - (2) 一つのからだと多様な部分（12〜14 節）
   - (3) たとえの適用（15〜26 節）
   - (4) 多様性の再確認（27〜31 節）

4. 結論：聖霊のバプテスマについて

御霊の賜物の多様性について学ぶ。

Ⅰ．一つの御霊と多様な賜物（4〜11 節）

1. 4〜7 節

1Co 12:4 さて、賜物はいろいろありますが、与える方は同じ御霊です。

1Co 12:5 奉仕はいろいろありますが、仕える相手は同じ主です。

1Co 12:6 働きはいろいろありますが、同じ神がすべての人の中で、すべての働きをなさいます。

1Co 12:7 皆の益となるために、一人ひとりに御霊の現れが与えられているのです。

(1) 三位一体の神の中に一致が存在する。

①同じ御霊が多様な賜物を与える。

②主（メシア）が御霊の賜物に従ってその人をいろいろな職責に任命する。

③父なる神が、賜物の行使を可能にする。

(2) 三位一体の神は、多様性と一致のモデルである。

①御霊の賜物に関しても、多様性と一致が存在する。

(3) 御霊の賜物は、ギリシア語で「カリスマ」である。

①恵み

②恵みによる賜物

③恵みであるがゆえに、人間の努力によって得られるものではない。

④御霊の賜物は、奉仕のために神から与えられた能力である。

⑤御霊の賜物は、その人の霊性の指標となるものではない。

(4) コリントの信者たちは、異言を重視していた。

①一致とは、同じ賜物を持つことからくるのではない。

②一致とは、同じ御霊を持つことからくるのである。

(5) 教会の中には、多様な奉仕があり、各人が異なった奉仕をしている。

①一致とは、同じ主に仕えるということからくる。

②一致とは、同じ神がすべての人の中で働いているということからくる。

③各人には、なんらかの御霊の賜物が与えられている。

④その賜物は、自分を誇示するためではなく、全体の益になるためのものである。

⑤自然な流れで、御霊の賜物がリストアップされる。

2. 8〜10 節

1Co 12:8 ある人には御霊を通して知恵のことばが、ある人には同じ御霊によって知識のことばが与えられています。

1Co 12:9 ある人には同じ御霊によって信仰、ある人には同一の御霊によって癒やしの賜物、

1Co 12:10 ある人には奇跡を行う力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。

（1）知恵のことば

①学んだ霊的真理を、具体的状況に適用する能力である。

（2）知識のことば

①霊的な知識に関する賜物である。

②みことばを理解し、それを体系化する（関連付ける）賜物である。

③賜物は複合的なものである（知識のことばと教える賜物）。

（3）信仰

①救いに必要な信仰は、すべての信者が持っている。

②ここでの信仰とは、いかなる場合でも疑いなく神を信頼することである。

③信仰の偉人たちは、この賜物を持っていた。

（4）癒やしの賜物

①「癒し」（複数形）の「賜物」（複数形）

②この賜物は、与えられたり、取り去られたりする。

③癒やしを受ける側の信仰は問題にならない。

＊使 3：1〜8、9：32〜34、36〜42、20：9〜12、28：8

（5）奇跡を行う力

①「奇跡」（複数形）を行う「力」（複数形）

②癒やしの賜物と同じように、永続性はない。

（6）霊を見分ける力

①一般的に信者はみことばに照らし合わせて、霊を吟味する必要がある。

②この賜物は、教え（問題）の源が悪霊的なものかどうかをただちに見分ける。

（7）異言

①学んだことのない言語を話す能力である。
②話している本人には意味が分からないが、それでもそれは実在の言語である。
③使 2 章では、この賜物を受けた者たちは、他国の言葉で福音を語り出した。
④離散の地から来たユダヤ人たちは、自分たちの国言葉で福音を聞いた。

(8) 異言を解き明かす力
①使 2 章では、この賜物は必要なかった。
②単一言語の会衆の中では、この賜物が、異言の賜物を行使する条件となる。

3. 11 節

1Co 12:11 同じ一つの御霊がこれらすべてのことをなさるのであり、御霊は、みこころのままに、一人ひとりそれぞれに賜物を分け与えてくださるのです。

(1) 誤解からの解放
①同じ一つの御霊が、多様な賜物を分け与えてくださる。
②御霊は、それぞれの信者に、なんらかの賜物を分け与えてくださる。
③信者は、自分に与えられている賜物を誇ることができない。
④信者は、他者に与えられている賜物を妬むことができない。

Ⅱ．一つのからだと多様な部分（12〜14 節）

1. 12 節

1Co 12:12 ちょうど、からだが一つでも、多くの部分があり、からだの部分が多くても、一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。

(1) 人間のからだとキリストのみからだ（教会）の類似性
①からだは一つであるが、多くの部分がある。
②多くの部分があっても、一つのからだである。
③教会も、それと同じである。
④教会は一つであるが、部分は多くある。
⑤神の愛は、みからだ（教会）を通して、この世に示される。

2. 13〜14 節

1Co 12:13 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。
1Co 12:14 実際、からだはただ一つの部分からではなく、多くの部分から成っています。

(1) 信者が一つのからだとなる方法
①ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、同じ方法で一つのからだとなった。

②一つの御霊によってバプテスマを受けた。

＊水のバプテスマではない。

③みな一つの御霊を飲んだ。

＊聖霊の内住のことである。

(2) からだは、多くの部分がなければ成り立たない。

①みからだもそれと同じで、多くの奉仕がなければ成り立たない。

②同じ御霊の賜物を求めるなら、教会は成り立たない。

結論：聖霊のバプテスマ

1. 1 コリ 12：13

1Co 12:13 私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです。

2. 聖霊のバプテスマは、ペンテコステ以降の祝福である。

(1) 旧約聖書にはそれへの言及がない。

(2) バプテスマのヨハネは、自分のバプテスマと聖霊のバプテスマを区別した。

(3) キリストは、昇天前に、信者が聖霊のバプテスマを受けることを預言した。

(4) 聖霊のバプテスマは、教会の誕生とともに始まった。

3. 聖霊のバプテスマということばの意味は、キリストとの一体化である。

(1) 聖霊のバプテスマは、キリストを信じた瞬間に起こる。

(2) バプテスマの本来的意味は、一体化である。

(3) 聖霊のバプテスマとは、信者がキリストと一体化し、教会に加えられることである。

(4) 従って、真のクリスチャンは皆、聖霊のバプテスマを受けている。

(5) 信者をキリストと一体化させるのは、聖霊の働きである。

4. 歴史上、聖霊のバプテスマのしるしとして異言が与えられることがあった。

(1) ユダヤ人、サマリア人、異邦人、バプテスマのヨハネの弟子たち

(2) これらの出来事は、福音の普遍性を証明するために起こった。

(3) 歴史上起こったことを、普遍的教理として教えてはならない。

(4) 異言の賜物は、今も一部の人たちに与えられている。

(5) 聖霊のバプテスマを受けたときに、異言で語りだすわけではない。

(6) 真に救われている人は全員、聖霊の働きによって、キリストと一体化している。

(7) 異言の賜物が与えられていない人は、別の賜物を与えられている。

コリント人への手紙第一　23 回
御霊の賜物（3）
―一致と多様性（2）―
12：15〜31

はじめに

1. 文脈の確認
   - (1) 結婚に関する教え（7：1〜40）
   - (2) 偶像に献げられた肉（8：1〜11：1）
   - (3) 女のかぶり物（11：2〜16）
   - (4) 聖餐式（11：17〜34）
   - (5) 御霊の賜物（12〜14）
     - ①御霊による信仰告白（12：1〜3）
     - ②一致と多様性（12：4〜31）
     - ③愛の優位性（13：1〜13）
     - ④異言よりも預言（14：1〜25）
     - ⑤正しい賜物の行使（14：26〜40）

2. 注目すべき点
   - (1) コリント教会の礼拝に混乱をもたらした 3 つの要因
     - ①女のかぶり物
     - ②聖餐式
     - ③御霊の賜物
   - (2) 御霊の賜物が最も深刻な問題である。
     - ①パウロは、14 章で異言の問題を取り上げる。
     - ②その前に、御霊の賜物全般について解説する。

3. アウトライン（一致と多様性）
   - (1) 一つの御霊と多様な賜物（4〜11 節）
   - (2) 一つのからだと多様な部分（12〜14 節）
   - (3) たとえの適用（15〜26 節）
   - (4) 多様性の再確認（27〜31 節）

4. 結論：使徒たちと預言者たち

御霊の賜物の一致と多様性について学ぶ。

Ⅰ．一つの御霊と多様な賜物（4〜11 節）

Ⅱ．一つのからだと多様な部分（12〜14 節）

Ⅲ．たとえの適用（15〜26 節）

1．15〜17 節

1Co 12:15 たとえ足が「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。

1Co 12:16 たとえ耳が「私は目ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。

1Co 12:17 もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が耳であったら、どこでにおいを嗅ぐのでしょうか。

(1) からだのたとえの適用（教訓）を記している。

①健康なからだには、通常、多様な部分が備わっている。

②教訓とは、自分を過小評価する必要はないということである。

③また、他の信者を過小評価してはならないということである。

(2) 足は、自分が手ではないことを卑下する必要はない。

①足は、立つ、歩く、走る、上る、蹴る、踊るなどの役割を果たすことができる。

(3) 耳は、目のような役割を果たすことができないと卑下する必要はない。

①声や音が聞こえにくくなると、耳の役割の大切さが分かるようになる。

(4) 多様性のないからだは、生き延びることができない。

①からだ全体が目であったら、物音を聞くことができない。

②からだ全体が耳であったら、においを嗅ぐことができない。

③パウロの強調点

＊からだ全体が舌（tongue）（異言）であれば、それは異常である。

＊コリントの信者たちは、異言の賜物だけを重視していた。

2．18〜20 節

1Co 12:18 しかし実際、神はみこころにしたがって、からだの中にそれぞれの部分を備えてくださいました。

1Co 12:19 もし全体がただ一つの部分だとしたら、からだはどこにあるのでしょうか。

1Co 12:20 しかし実際、部分は多くあり、からだは一つなのです。

(1) 神は、御心にしたがって、からだを造ってくださった。

①からだの中に多様な部分を備えてくださった。
②全体がただ一つの部分だとしたら、からだは存在しなくなる。
③実際は、部分は多くあり、からだは一つである。

(2) キリストのみからだである教会も、これと同じである。
①神は、御心にしたがって多くの御霊の賜物を教会に与えてくださった。
②他の人に与えられている賜物を妬んだり、うらやんだりする必要はない。
③目立たない賜物でも、教会には不可欠なものである。
④それぞれの部分が、全体の祝福のために仕えているのである。

3. 21〜22 節

1Co 12:21 目が手に向かって「あなたはいらない」と言うことはできないし、頭が足に向かって「あなたがたはいらない」と言うこともできません。
1Co 12:22 それどころか、からだの中でほかより弱く見える部分が、かえってなくてはならないのです。

(1) 他の人に与えられている賜物を軽蔑してはならない。
①目は見ることができるが、手のように仕事をすることはできない。
②頭は判断することができるが、足のように移動することはできない。

(2) からだの中でほかより弱く見える部分が、かえって不可欠の部分である。
①心臓、肺、肝臓、腎臓などの内臓は、目立つことなしに、忠実に働いている。
②手や足がなくても生きることができるが、内臓なしには生きることができない。

4. 23〜24 節 a

1Co 12:23 また私たちは、からだの中で見栄えがほかより劣っていると思う部分を、見栄えをよくするものでおおいます。こうして、見苦しい部分はもっと良い格好になりますが、
1Co 12:24a 格好の良い部分はその必要がありません。

(1) 私たちのからだに関して
①見栄えが劣っている部分を、衣服で覆う。
＊パウロは、生殖器に言及していると思われる。
②格好の良い部分は、露出したままである。

(2) 教会に関して
①目立たない賜物や奉仕は、もっと大切にされるべきである。
＊掃除、礼拝のために準備、苦しんでいる人への奉仕、ベビーシッター

5. 24b〜25 節

1Co 12:24b 神は、劣ったところには、見栄えをよくするものを与えて、からだを組み合わせられました。

1Co 12:25 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いのために、同じように配慮し合うためです。

(1) 私たちのからだに関して

①劣った部分と見栄えの良い部分の差が埋まるように、神は配慮しておられる。

(2) 教会に関して

①各部分が、互いを受け入れ、配慮し合うように、神は導いておられる。

6. 26 節

1Co 12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。

(1) これは、私たちのからだに関しても、教会に関しては言えることである。

①ロマ 12：15

Rom 12:15 喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい。

②ここまでのたとえは、主に人間のからだに関するものであった。

③次の箇所では、教会に関する教えに移行する。

Ⅳ. 多様性の再確認（27〜31 節）

1. 27 節

1Co 12:27 あなたがたはキリストのからだであって、一人ひとりはその部分です。

(1) コリント教会は、普遍的教会ではない。

①コリント教会は、地域教会である。

②コリント教会は、普遍的教会の一部である。

③信者たちは、普遍的教会の一部であると同時に、地域教会の一部である。

2. 28 節

1Co 12:28 神は教会の中に、第一に使徒たち、第二に預言者たち、第三に教師たち、そして力あるわざ、そして癒やしの賜物、援助、管理、種々の異言を備えてくださいました。

(1) このリストは、御霊の賜物をすべて網羅したものではない。

①使徒たち

＊12 使徒

＊パウロ、バルナバ、ヤコブ、シラス、テモテ

＊エペ 2：20

Eph 2:20 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。

②預言者たち

＊新約聖書が完結するまでは、神は預言者たちを通して語られた。

③教師たち

＊みことばを一般信徒に分かるように教える人たち

④力あるわざ

＊死者を蘇生させたり、悪霊を追い出したりする能力

⑤癒やしの賜物

＊瞬時に病を癒やす能力

⑥援助

＊執事の賜物

⑦管理

＊長老や監督の賜物

⑧種々の異言

＊パウロは、異言を最後に置いた。

＊コリントの信者たちは、異言を最初に置いていた。

3. 29〜30 節

1Co 12:29 皆が使徒でしょうか。皆が預言者でしょうか。皆が教師でしょうか。すべてが力あるわざでしょうか。

1Co 12:30 皆が癒やしの賜物を持っているでしょうか。皆が異言を語るでしょうか。皆がその解き明かしをするでしょうか。

(1) この質問は、「NO」という答えを想定したものである。

①からだは一つ、賜物は多数。

②教会は、各人が自分の賜物を発揮することによって建て上がって行く。

4. 31 節

1Co 12:31 あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。／私は今、はるかにまさる道を示しましょう。

(1)「よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい」

①これは、個人としてではなく、地域教会として求めよという勧めである。

②どんな賜物も、軽視してはならない。

③しかし、教会の益になるかどうかという視点から見ると、優劣の差がある。
④賜物のリストの順番が、優劣の順番になっている。

(2)「私は今、はるかにまさる道を示しましょう」
①これは、愛の章（13 章）へのイントロダクションである。
②賜物は、持っていること以上に、愛に基づいて用いることが重要である。
③特に、異言の行使においては愛が必要である。
④異言を語る人は、自己中心的になるべきではない。
⑤異言を語らない人は、異言の賜物を侮辱してはならない。

結論：使徒たちと預言者たち

1. 使徒たち
(1) 12 使徒（使 1：22）
①イエスが洗礼を受けたときから弟子であった人 たち
(2) 第 2 グループの使徒たち
①復活のイエスに出会った人 たち
②パウロはこの資格を満たしている（1 コリ 9：1）。
③バルナバもまた第 2 グループの使徒である（使 14：14）。
④イエスの弟のヤコブも同じである（1 コリ 15：7、ガラ 1：19）。
(3) 使徒と預言者の賜物は、終了した。
①エペ 2：19〜22 によれば、使徒と預言者は「土台」 である。
②キリストは「礎石」である。
③信者は建物を形成する石材 である。

2. 預言者たち
(1) 預言者たちの使命は、神からの啓示を受けてそれを記録することである。
(2) 使徒は、預言の賜物も持っている。
(3) 新約時代の「預言者」と「使徒」によって、「恵みの時代」の啓示はすべて記録された。

コリント人への手紙第一　24 回
御霊の賜物（4）
―愛の優位性―
13：1〜13

はじめに

1. 文脈の確認
   - （1）結婚に関する教え（7：1〜40）
   - （2）偶像に献げられた肉（8：1〜11：1）
   - （3）女のかぶり物（11：2〜16）
   - （4）聖餐式（11：17〜34）
   - （5）御霊の賜物（12〜14）
     - ①御霊による信仰告白（12：1〜3）
     - ②一致と多様性（12：4〜31）
     - ③愛の優位性（13：1〜13）
     - ④異言よりも預言（14：1〜25）
     - ⑤正しい賜物の行使（14：26〜40）

2. 注目すべき点
   - （1）コリント教会の礼拝に混乱をもたらした 3 つの要因
     - ①女のかぶり物、②聖餐式、③御霊の賜物
   - （2）御霊の賜物が最も深刻な問題である。
     - ①愛の章は、御霊の賜物の行使という文脈の中で出てくる。

3. アウトライン
   - （1）愛の必要性（1〜3 節）
   - （2）愛の特徴（4〜7 節）
   - （3）愛の永続性（8〜13 節）

4. 結論：愛（アガペー）とは

聖書が教える愛について学ぶ。

Ⅰ．愛の必要性（1〜3 節）

1. 1 節

1Co 13:1 たとえ私が人の異言や御使いの異言で話しても、愛がなければ、騒がしいどらや、

うるさいシンバルと同じです。

(1) パウロの視点

①信者の霊性は、異言、知恵、知識などによって決まるものではない。

②1：2

1Co 1:2 コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たちの主です。

＊キリスト･イエスにあって聖なる者とされた人の特徴は、愛である。

(2) パウロは、愛に関する教えを異言の賜物から始める。

①異言の賜物があっても、それを全体の益のために用いないなら無意味である。

②異言とは、なんらかの言語である。

＊人の異言と、御使いの異言がある。

＊異言は、同じ音のくり返しではない。

③解き明かしのできる人を通して、意味が伝わらなければ無意味である。

＊騒がしいどらや、うるさいシンバルと同じである。

2. 2節

1Co 13:2 たとえ私が預言の賜物を持ち、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じていても、たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、私は無に等しいのです。

(1) 異言の賜物から、より優れた賜物に進む。

①預言の賜物によって、あらゆる奥義とあらゆる知識に通じているとしても。

②山を動かすほどの完全な信仰を持っていると仮定しても。

③それらの賜物を全体の益のために用いないなら（愛がないなら）、意味がない。

④私は無に等しい。

3. 3節

1Co 13:3 たとえ私が持っている物のすべてを分け与えても、たとえ私のからだを引き渡して誇ることになっても、愛がなければ、何の役にも立ちません。

(1) より優れた賜物から、勇敢な行為に進む。

①財産のすべてを貧しい人たちに分け与えたとしても。

②殉教の死を遂げたとしても。

＊「また私のからだを焼かれるために渡しても、」（新改訳第3版）

③それらの行為が自分を誇るためのものであるなら、なんの意味もない。

④全体の益のためでないなら（愛がなければ）、なんの役にも立たない。

Ⅱ．愛の特徴（4〜7 節）

1．4 節 a

1Co 13:4a　愛は寛容であり、愛は親切です。

(1) この部分は、愛に関する論考というより、実際問題への解決策である。

(2) パウロは、コリントの信者たちの特徴とは正反対の内容を列挙する。

①彼らは寛容ではないが、愛は寛容である。

②彼らは親切ではないが、愛は親切である。

③寛容と親切は、御霊の実である（ガラ 5：22)。

④寛容と親切は、三位一体の神の性質である。

2．4b〜5 節

1Co 13:4b　また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。

1Co 13:5　礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、苛立たず、人がした悪を心に留めず、

(1) 愛はどのように振る舞うか。

①彼らは人をねたむが、愛はねたまない。

②彼らは自慢するが、愛は自慢しない。

③彼ら高慢であるが、愛は高慢にならない。

④彼らは礼儀に反することをするが、愛は礼儀に反することはしない。

⑤彼らは自分の利益を求めるが、愛は自分の利益をもとめない。

⑥彼らは苛立つが、愛は苛立たない。

＊苛立ちは、完璧を求めるところから生まれる。

＊神以外に完璧な方はいない。

⑦彼らは人のした悪を心に留めるが、愛は人のした悪を心に留めない。

3．6〜7 節

1Co 13:6　不正を喜ばずに、真理を喜びます。

1Co 13:7　すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます。

(1) 愛の行為の列挙が続く。

①愛は不正を喜ばずに、真理を喜ぶ。

②愛はすべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍ぶ。

Ⅲ．愛の永続性（8〜13 節）

1．8 節

1Co 13:8 愛は決して絶えることがありません。預言ならすたれます。異言ならやみます。知識ならすたれます。

(1) 愛は永遠であるが、御霊の賜物は一時的である。

(2) 御霊の実は永遠であるが、御霊の賜物はすたれていく。

①預言はすたれる。

＊聖書 66 巻の完成によって、預言の賜物は不要となった。

②異言はやむ。

＊神のことばを直接聞くようになるので、別のことばは不要になる。

③知識はすたれる。

＊すべてのことを知るようになるので、今の知識は不要になる。

2. 9〜10 節

1Co 13:9 私たちが知るのは一部分、預言するのも一部分であり、

1Co 13:10 完全なものが現れたら、部分的なものはすたれるのです。

(1) 今の状態

①私たちの知識は、部分的である。

②私たちが預言する内容も、部分的である。

(2)「完全なものが現れたら」

①携挙かキリストの再臨のことであろう。

②そのとき、私たちは神に関する知識の全体を知ることになる。

③その結果、部分的なものはすたれる。

3. 11 節

1Co 13:11 私は、幼子であったときには、幼子として話し、幼子として思い、幼子として考えましたが、大人になったとき、幼子のことはやめました。

(1) 幼子と大人の対比

①幼子の特徴は、一時的なものに関心があること。

＊ビー玉、メンコ、喫茶店のマッチ箱

＊コリントの信者たちは、一時的な賜物に関心があった。

＊彼らは、霊的幼子である。

②大人の特徴は、永続性のあるものに関心があること。

＊愛をゴールとする人は、幼子から大人に変化した人である。

4. 12 節

1Co 13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。

(1) 今の状態と将来の状態の対比

①コリントの町は、青銅製の鏡の産地として知られていた。

②今の状態は、主を間接的に見ている状態である。

＊今、私たちは一部分しか知らない。

③将来の状態は、主を直接的に見る状態である。

＊「そのときには」とは、携挙か再臨のときであろう。

＊私たちは、主を完全に知ることになる。

5. 13 節

1Co 13:13 こういうわけで、いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。

(1) 消え去るものといつまでも残るものの対比

①知識、異言、預言は、やがて消え去る。

②信仰と希望と愛は、いつまでも残る。

＊信仰とは、賜物としての信仰ではなく、信者の特徴である神への信頼。

＊信仰と希望は、賜物であると同時に、信者の徳でもある。

(2) 賜物よりも徳のほうが、価値が高い。

①信仰と希望と愛の間にも、優劣の差がある。

②愛は、増し加わるのみである。

③信仰と希望は、その必要性が弱まる。

結論：愛（アガペー）とは

1. ギリシア語で「愛」は、4 つある。

(1) アガペーの愛：無条件の愛、自己犠牲の愛、意志に基づく愛

(2) エロスの愛：恋愛感情に基づく愛、性的な愛

(3) フィリアの愛：友情に基づく愛、敬意に基づく愛

(4) ストルゲの愛：家族間の愛、親子間の愛

2. ここで語られているのは、アガペーの愛である。

(1) この愛は、無条件の愛、自己犠牲の愛、意志に基づく愛である。

(2) 新約聖書では、ほとんどの場合、この愛は神の愛を指す。

①神は愛である（1 ヨハ 4：8）。
②神が愛する価値のない者を無条件で愛するのは、神の性質が愛だからである。
③アガペーの愛は、行動によって表現される愛である。
「キリストは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです」（1 ヨハ 3：16a）
④神の無条件の愛を受け取ることが、信仰である。

3. アガペーの愛は、私たちの内にはない。
(1) この愛は、聖霊によって与えられるものである。
①聖化の完成は、聖霊と私たちの共同作業である。
(2) クリスチャン生活のゴールは、キリストの姿に似ることである。
①キリストの姿に似れば似るほど、愛の人になる。

コリント人への手紙第一　25 回
御霊の賜物（5）
―異言よりも預言―
14：1〜25

はじめに

1. 文脈の確認
   （1）御霊の賜物（12〜14）
      ①御霊による信仰告白（12：1〜3）
      ②一致と多様性（12：4〜31）
      ③愛の優位性（13：1〜13）
      ④異言よりも預言（14：1〜25）
      ⑤正しい賜物の行使（14：26〜40）

2. 注目すべき点
   （1）教会に混乱をもたらした最大の要因は、御霊の賜物の誤用であった。
   （2）愛の章（13 章）は、御霊の賜物の行使という文脈の中で出てくる。
   （3）14 章は、集会での賜物の行使に関する教えである。

3. アウトライン
   （1）異言より預言（1〜5 節）
   （2）2 つの例話（6〜12 節）
   （3）信者を念頭に置いた適用（13〜19 節）
   （4）不信者を念頭に置いた適用（20〜25 節）

4. 結論：現代的適用

教会の集会に関する教えを学ぶ。

Ⅰ．異言より預言（1〜5 節）

1. 1 節

1Co 14:1 愛を追い求めなさい。また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。

（1）「愛を追い求めなさい」は、13 章と 14 章をつなげることばである。
   ①クリスチャンは、他者への奉仕を優先すべきである。

（2）「御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい」

①御霊の賜物は、神の御心によって分け与えられる。
②と同時に、信者が神に願うこともできる。
③教会全体の益となるために、御霊の賜物を求めるべきである。
④預言の賜物は、異言の賜物よりも、群全体の益となる。

2. 2 節

1Co 14:2 異言で語る人は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語ります。だれも理解できませんが、御霊によって奥義を語るのです。

(1) 異言の解き明かしなしに、異言を語ればどうなるか。
①神は理解されるが、人は異言（外国語）を理解することができない。

(2) 異言を語る人は御霊によって奥義を語る。
①奥義とは、御霊によって啓示された新しい真理である。
②人には、異言が伝えている奥義を理解することができない。
③つまり、異言は教会成長の役に立たないということである。

3. 3 節

1Co 14:3 しかし預言する人は、人を育てることばや勧めや慰めを、人に向かって話します。

(1) 預言の賜物は、異言の賜物よりも優れている。
①預言する人は、人に理解できることばを語る。
②預言のことばは、人を育てる。
③預言のことばは、聞く人にとって勧めや慰めとなる。

4. 4 節

1Co 14:4 異言で語る人は自らを成長させますが、預言する人は教会を成長させます。

(1) 文脈は、集会における賜物の行使であって、デボーション体験ではない。
①集会の中で異言を語る人
＊解き明かしがないと、その内容は理解できない。
＊本人は、賜物の行使を通して、神の恵みと愛を確信することができる。
＊その結果、喜びに満たされ、神を賛美するようになる。
＊しかし、自らを成長させているだけで、全体の益とはなっていない。
②集会の中で預言を語る人
＊その人は、他の人にも分かることばで、神の真理を語る。
＊その人は、教会を成長させる。
＊群れ全体のために奉仕をすれば、個人的な成長も経験するようになる。

5. 5 節

1Co 14:5 私は、あなたがたがみな異言で語ることを願いますが、それ以上に願うのは、あなたがたが預言することです。異言で語る人がその解き明かしをして教会の成長に役立つのでないかぎり、預言する人のほうがまさっています。

(1) パウロは、異言を軽視していない。

①「あなたがたがみな異言で語ることを願いますが、」

＊パウロは、賜物を独占することを願っているわけではない。

＊と同時に、すべての人が同じ賜物を持つわけではないことも知っている。

(2) パウロは、異言よりも預言を高く評価している。

①解き明かしのない異言は、教会の成長に役立たない。

＊本人による解き明かしと他者による解き明かしがある。

②預言は、教会の成長に役立つ。

Ⅱ．2 つの例話（6〜12 節）

1. 6 節

1Co 14:6 ですから、兄弟たち。私があなたがたのところに行って異言で語るとしても、啓示か知識か預言か教えによって語るのでなければ、あなたがたに何の益になるでしょう。

(1) 最初の例話は、パウロ自身の宣教の例である。

①パウロがコリント教会に行って、異言で語ったらどうなるか。

②異言は理解できないことばなので、コリントの信者たちに益とならない。

③益となる方法とは、理解可能なことばで語ることである。

＊啓示と知識は、内面的な理解のことである。

＊預言と教えは、それを与える行為のことである。

2. 7〜8 節

1Co 14:7 笛や竪琴など、いのちのない楽器でも、変化のある音を出さなければ、何を吹いているのか、何を弾いているのか、どうして分かるでしょうか。

1Co 14:8 また、ラッパがはっきりしない音を出したら、だれが戦いの準備をするでしょう。

(1) 第 2 の例話は、楽器やラッパの例である。

①笛や竪琴の演奏

＊明瞭な音階と適度なリズムがなければ、演奏を楽しむことはできない。

②ラッパの音

＊同じ音を長く吹いても、兵士たちは動かない。

3. 9 節

1Co 14:9 同じようにあなたがたも、舌で明瞭なことばを語らなければ、話していることをどうして分かってもらえるでしょうか。空気に向かって話していることになります。

(1) 人間の舌（語るための器官）も同じである。

①明瞭なことばで語らなければ、話していることを理解してもらえない。

②それは、空中に向って話しているのと同じである。

(2) 教えは、明瞭で簡潔でなければならない。

①聴衆が理解できないことばや内容は、自己満足に終わるだけである。

4. 10〜11 節

1Co 14:10 世界には、おそらく非常に多くの種類のことばがあるでしょうが、意味のないことばは一つもありません。

1Co 14:11 それで、もし私がそのことばの意味を知らなければ、私はそれを話す人にとって外国人であり、それを話す人も私には外国人となるでしょう。

(1) 世界には、実に多くの種類のことばがある。

①パウロは、「意味のないことばは一つもありません」と断じた。

②もしパウロが、そのことばの意味を知らなければ、彼も聞く人も外国人となる。

5. 12 節

1Co 14:12 同じようにあなたがたも、御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会を成長させるために、それが豊かに与えられるように求めなさい。

(1) パウロは、御霊の賜物を求めることを否定していない。

①教会成長のために、御霊の賜物が豊かに与えられるように求めるべきである。

Ⅲ. 信者を念頭に置いた適用（13〜19 節）

1. 13〜14 節

1Co 14:13 そういうわけで、異言で語る人は、それを解き明かすことができるように祈りなさい。

1Co 14:14 もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈りますが、私の知性は実を結びません。

(1) 異言で語る人は、解き明かすことができるように祈るべきである。

①異言で語る人が解き明かしの賜物を持つこともあるが、これは例外的なこと。

②他の人が解き明かしてくれるように、祈るべきである。

(2) 集会の中で、異言で祈るとどうなるか。

①理解できないことばであっても、その人の霊は祈っている。

②しかし、祈りの内容が分からないので、知性は実を結ばない。

③その祈りを聞いている人たちにとっても、益にはならない。

2. 15 節

1Co 14:15 それでは、どうすればよいのでしょう。私は霊で祈り、知性でも祈りましょう。霊で賛美し、知性でも賛美しましょう。

(1) パウロが勧める祈り

①霊（感情）と知性（理解）がともに関わった祈りをすべきである。

②賛美に関しても、同じことが言える。

3. 16〜17 節

1Co 14:16 そうでないと、あなたが霊において賛美しても、初心者の席に着いている人は、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。あなたが言っていることが分からないのですから。

1Co 14:17 あなたが感謝するのはけっこうですが、そのことでほかの人が育てられるわけではありません。

(1) いかに感動的な賛美でも、意味が分からなければアーメンと言えない。

①感謝すること自体は、結構なことである。

②しかし、理解できないことばを使うなら、ほかの人を育てることにはならない。

4. 18〜19 節

1Co 14:18 私は、あなたがたのだれよりも多くの異言で語っていることを、神に感謝しています。

1Co 14:19 しかし教会では、異言で一万のことばを語るよりむしろ、ほかの人たちにも教えるために、私の知性で五つのことばを語りたいと思います。

(1) パウロには、異言の賜物が与えられていた。

①コリントの信者の誰よりも、多くの異言で語れた。

②しかし、彼の関心は、自己顕示ではなく、他者への奉仕に向けられていた。

(2) 異言で語る一万のことばよりも、知性で語る五つのことばのほうが優れている。

①知性で語ることばによって、ほかの人たちを教えることができる。

Ⅳ. 不信者を念頭に置いた適用（20〜25 節）

1. 20 節

1Co 14:20 兄弟たち、考え方において子どもになってはいけません。悪事においては幼子でありなさい。けれども、考え方においては大人になりなさい。

(1) 子どもの特徴

①有益なことよりも楽しいことを優先させる。

②永遠の価値があるものよりも一時的なものを優先させる。

③隣人愛よりも自己満足を優先させる。

(2) 信者への教訓

①肯定的な側面。悪事においては幼子でありなさい。

②否定的な側面。考え方においては大人になりなさい。

2. 21〜22 節

1Co 14:21 律法にこう書かれています。／「『わたしは、異国の舌で、／異なる唇でこの民に語る。／それでも彼らは、／わたしの言うことを聞こうとはしない』／と主は言われる。」

1Co 14:22 それで異言は、信じている者たちのためではなく、信じていない者たちのためのしるしであり、預言は、信じていない者たちのためではなく、信じている者たちのためのしるしです。

(1) パウロは、イザヤ書 28 章 11 節から引用する。

①イスラエルは、預言者たちが伝えた神のことばを拒否した。

②それゆえ、外国語で別のメッセージが民に伝えられる。

③外国語は、神の裁きのしるしである。

④この預言は、アッシリア軍がエルサレムを包囲したときに成就した。

⑤アッシリア語は、民が神のことばを拒否したことの明白なしるしとなった。

(2) パウロによる適用

①神は、異言（外国語）を不信者のためのしるしとされた。

＊ここでの不信者とは、神のことばに心を閉ざした者である。

＊異言は不信者のためのしるしなので、集会では異言を語るべきではない。

②預言は、信者のためのしるしである。

＊それゆえ、信者が集う集会では預言を語るべきである。

3. 23 節

1Co 14:23 ですから、教会全体が一緒に集まって、皆が異言で語るなら、初心の人か信じていない人が入って来たとき、あなたがたは気が変になっていると言われることにならないでし

ょうか。

(1) ここでの「信じていない人」は、神のことばを学ぼうとする未信者である。

①皆が異言で語るなら、その人はつまずくはずである。

②信者はみな気が変になっていると感じるはずである。

4. 24〜25 節

1Co 14:24 しかし、皆が預言をするなら、信じていない人や初心の人が入って来たとき、その人は皆に誤りを指摘され、皆に問いただされ、

1Co 14:25 心の秘密があらわにされます。こうして、「神が確かにあなたがたの中におられる」と言い、ひれ伏して神を拝むでしょう。

(1) 預言を語ることの利点

①未信者や初心の人は、預言の内容を理解する。

②その結果、自らの誤りを認識し、罪を認めるようになる。

③彼は、神が直接自分に語っておられるかのように感じる。

④彼は、「神が確かにあなたがたの中におられる」と告白するようになる。

⑤彼は、ひれ伏して神を礼拝するようになる。

結論 ：現代的適用

1. 異言の賜物をどう評価するか。

(1) 異言は神から与えられた賜物である。

(2) 異言を語る人も、語らない人も、お互いを尊敬すべきである。

2. 同じ音のくり返しでも、異言と言えるか。

(1) 今も異言の賜物は存在している。

(2) 同じ音のくり返しは、異言とは思えない（言語になっていない）。

3. 礼拝の中での異言の祈りは、許されるか。

(1) 解き明かしがあれば、許される。

(2) 解き明かしがないなら、異言を語ってはならない。

4. 預言の賜物は、今も存在するか。

(1) 新約聖書が完成するまでは、預言の賜物が必要とされた。

(2) 新約聖書が完成した今は、預言の賜物は不要となった。

5. 預言の賜物と教える賜物の関係とは何か。

(1) この 2 つの賜物は、同じものではない。

(2) 今も時代、明瞭なことばで神のことばを語るのは、教える賜物がある人である。

(3) 講解メッセージを通して、聖霊が働かれる。

コリント人への手紙第一　26 回
御霊の賜物（6）
―正しい賜物の行使―
14：26〜40

はじめに

1. 文脈の確認
   （1）御霊の賜物（12〜14）
      ①御霊による信仰告白（12：1〜3）
      ②一致と多様性（12：4〜31）
      ③愛の優位性（13：1〜13）
      ④異言よりも預言（14：1〜25）
      ⑤正しい賜物の行使（14：26〜40）

2. 注目すべき点
   （1）教会に混乱をもたらした最大の要因は、御霊の賜物の誤用であった。
   （2）愛の章（13 章）は、御霊の賜物の行使という文脈の中で出てくる。
   （3）14 章は、集会での賜物の行使に関する教えである。
   （4）当時は、今のような礼拝形式がまだ確立していなかった。

3. アウトライン
   （1）秩序の重要性（26〜33 節 a）
   （2）婦人の言動（33b〜35 節）
   （3）最後の勧め（36〜40 節）

4. 結論：異言の賜物に関する 7 つの教え

正しい賜物の行使について学ぶ。

Ⅰ．秩序の重要性（26〜33 節 a）

1. 26 節

1Co 14:26 それでは、兄弟たち、どうすればよいのでしょう。あなたがたが集まるときには、それぞれが賛美したり、教えたり、啓示を告げたり、異言を話したり、解き明かしたりすることができます。そのすべてのことを、成長に役立てるためにしなさい。

（1）26〜28 節は、異言の賜物の濫用を抑制するための教えである。
①異言の賜物が、礼拝に最も混乱をもたらしていた。

(2) 当時の礼拝は、形式張らず、自由なものであった。

①聖霊が、御霊の賜物（複数の信者）を用いて自由に働かれた。

②初代教会の礼拝は、いわば「オープンミーティング」であった。

③各人が、自発的に礼拝の奉仕に参加していた。

(3) 26 節から垣間見える礼拝の様子

①ある人が賛美する（詩篇か）。

②別の人が、そこから着想を得た教えを語る。

③また別の人が、預言の賜物を発揮して啓示を語る。

④さらに異言で語る人と解き明かしをする人がことばを発する。

⑤賜物を行使する人たちは、愛（教会の霊的成長）をゴールとして奉仕をする。

2. 27〜28 節

1Co 14:27 だれかが異言で語るのであれば、二人か、多くても三人で順番に行い、一人が解き明かしをしなさい。

1Co 14:28 解き明かす者がいなければ、教会では黙っていて、自分に対し、また神に対して語りなさい。

(1) 異言の賜物の行使に関する教え

①礼拝で異言の賜物を用いる場合は、2 人か 3 人に限定する。

②複数の人が同時に異言を語るのではなく、順番に行う。

③解き明かしができる者がいることが、異言を語るための条件である。

④解き明かす者がいなければ、教会の礼拝では黙っている。

⑤その人は、ことばに出さないで、自分と神に対して異言で語ればよい。

⑥全員が一斉に異言で祈ることは、許されていない。

3. 29 節

1Co 14:29 預言する者たちも、二人か三人が語り、ほかの者たちはそれを吟味しなさい。

(1) 礼拝の中で預言する者を、2 人か 3 人に限定する。

①異言を語る者の場合と同じである。

(2) ほかの者はそれを吟味する。

①神の霊によって語っているかどうかを見極める。

②もし神の霊によって語っていなければ、その人は偽預言者である。

4. 30〜31 節

1Co 14:30 席に着いている別の人に啓示が与えられたら、先に語っていた人は黙りなさい。

1Co 14:31 だれでも学び、だれでも励ましが受けられるように、だれでも一人ずつ預言することができるのです。

(1) 別の人に啓示が与えられたなら、先に語っていた人は黙る。

①長く語っていると、人間的な判断が混入する危険性がある。

(2) 預言者には一人ずつ順に預言する機会が与えられるべきである。

①その結果、だれでも学び、励ましを受けることができる。

5. 32〜33 節 a

1Co 14:32 預言する者たちの霊は預言する者たちに従います。

1Co 14:33a 神は混乱の神ではなく、平和の神なのです。

(1) コリントの信者たちの誤解

①聖霊に満たされている人ほど、自分を制御できないと考えていた。

②長く話し続けるのは、聖霊に満たされている証拠であると考えていた。

(2) パウロの教え

①預言の賜物を与える霊は、預言する者たちに従う。

②つまり、恍惚状態で預言するわけではない。

③預言者は、自分の意志で預言の賜物を制御することができる。

④神は混乱の神ではなく、平和の神である。

⑤混乱した礼拝の中には、神の臨在はない。

Ⅱ．婦人の言動（33b〜35 節）

1. 33b〜34

1Co 14:33b　聖徒たちのすべての教会で行われているように、

1Co 14:34 女の人は教会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていません。律法も言っているように、従いなさい。

(1) 章と節は、後の時代に付加された。

①ここでは、33 節の区分が不自然である。

②33 節 b は、本来 34 節に含まれるものである。

③これから教えることは、すべての教会に適用される普遍的真理である。

(2) 婦人の役割

①婦人には多くの役割が与えられている。

＊特に、家庭の管理、育児が重要である。

②しかし、教会の公の集会で発言することは、許されていない。

＊これは、おしゃべりのことではない。

＊権威をもって語ることである。

③「律法も言っているように」

＊創 3：16

Gen 3:16 女にはこう言われた。／「わたしは、あなたの苦しみとうめきを／大いに増す。／あなたは苦しんで子を産む。／また、あなたは夫を恋い慕うが、／彼はあなたを支配することになる。」

④「従いなさい」

＊婦人の役割は、夫への従順である。

(3) 明らかな矛盾をどのように解決するか。

①11：5

1Co 11:5 しかし、女はだれでも祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭を辱めることになります。それは頭を剃っているのと全く同じことなのです。

②14：34

1Co 14:34 女の人は教会では黙っていなさい。彼女たちは語ることを許されていません。律法も言っているように、従いなさい。

③前者では、婦人が集会の中で祈りや預言をすることが許可されている。

③後者では、語られた預言に対して応答することが禁じられている。

＊男に許されていることが婦人には許されていない。

④11：5 と 14：34 は、矛盾ではない。

2. 35 節

1Co 14:35 もし何かを知りたければ、家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、女の人にとって恥ずかしいことなのです。

(1) 質問すること自体が、教えることにつながる場合がある。

①そのような抜け穴を防ぐために、婦人には質問することが禁じられている。

②質問があれば、家で自分の夫に尋ねるべきである。

(2) 未婚の女性や寡婦は、どうしたらよいのか。

①聖書は、一般原則を述べている。

②未婚の女性には、父や兄がいる。

③寡婦には、教会の長老がいる。
④神の秩序に違反するのは恥ずべきことである、という点を覚えておけばよい。

Ⅲ．最後の勧め（36～40 節）

1．36 節

1Co 14:36 神のことばは、あなたがたのところから出たのでしょうか。あるいは、あなたがたにだけ伝わったのでしょうか。

(1) パウロは、予想される反論に対して「皮肉」を用いて回答している。
①「使徒たちの教え」以上に、自分たちは深い知識を持っているというのか。
②神のことばは、あなたがたのところから出たというのか。
③あるいは、あなたがたにだけ伝わったというのか。
④神のことばは自分たちのところから出たと主張できる教会は、存在しない。

2．37～38 節

1Co 14:37 だれかが自分を預言者、あるいは御霊の人と思っているなら、その人は、私があなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい。
1Co 14:38 それを無視する人がいるなら、その人は無視されます。

(1) パウロの教えは、彼自身が考えたことではない。
①それは、主の命令である。
②使徒たちの教えは、主ご自身から出たものである。
③自分を預言者や御霊の人と思っているなら、パウロの教えを認めるべきである。

(2) それを認めないなら、その人は預言者、御霊の人ではない。
①その人自身が、認められない状態にとどまることになる。

3．39 節

1Co 14:39 ですから、私の兄弟たち、預言することを熱心に求めなさい。また、異言で語ることを禁じてはいけません。

(1) 預言の賜物のほうが異言の賜物よりも優れている。
①預言のことばによって救いに導かれる未信者がいる。
②異言は、解き明かす人がいなければ、群全体の益にはならない。
③預言に関しては、それを熱心に求める。
④異言に関しては、それを禁じてはいけない。

4．40 節

1Co 14:40 ただ、すべてのことを適切に、秩序正しく行いなさい。

（1）これが結論である。

①適切に、秩序正しく

②今も、すべての教会がこの命令に従っているわけではない。

結論：異言の賜物に関する 7 つの教え

1. **異言を禁じてはならない（39 節）。**
2. **公の集会で異言を語る場合は、解き明かす人がいなければならない（27〜28 節）。**
3. **公の集会で異言を語る人の人数は、最大 3 人までである（27 節）。**
4. **異言を語る人は、同時にではなく、順番に語らなければならない（27 節）。**
5. **異言の内容は、群の成長に役立つものでなければならない（26 節）。**
6. **婦人は、語られた預言に応答することが許されていない（40 節）。**
7. **すべての集会は、適切に、秩序正しく行うべきである（40 節）。**

コリント人への手紙第一　27 回
復活（1）
―キリストの復活―
15：1〜11

はじめに

1. 文脈の確認
   （1）結婚に関する教え（7：1〜40）
   （2）偶像に献げられた肉（8：1〜11：1）
   （3）女のかぶり物（11：2〜16）
   （4）聖餐式（11：17〜34）
   （5）御霊の賜物（12〜14）
   （6）復活（15）
      ①キリストの復活（1〜11 節）
      ②死者の復活（12〜34 節）
      ③からだの復活（35〜49 節）
      ④奥義（50〜58 節）

2. 注目すべき点
   （1）復活に関する質問は、コリント教会からの手紙にはなかった。
   （2）しかしパウロは、このテーマを取り上げる必要性を感じていた。
   （3）パウロが 18 か月に及ぶ奉仕を終えて教会を去ると、偽教師が侵入して来た。
      ①ある者たちは、死後のいのちは信じたが、肉体の復活は否定した。
      ②また、パウロの使徒としての権威を疑問視する者も出て来た。
   （4）パウロは、復活がキリスト教信仰の土台であることを教える。

3. アウトライン－キリストの復活―
   （1）復活の事実（1〜4 節）
   （2）復活の目撃者（5〜7 節）
   （3）パウロの体験（8〜10 節）
   （4）まとめ（11 節）

4. 結論：福音の信頼性

キリストの復活について学ぶ。

Ⅰ．復活の事実（1〜4 節）

1. 1〜2 節

1Co 15:1 兄弟たち。私があなたがたに宣べ伝えた福音を、改めて知らせます。あなたがたはその福音を受け入れ、その福音によって立っているのです。

1Co 15:2 私がどのようなことばで福音を伝えたか、あなたがたがしっかり覚えているなら、この福音によって救われます。そうでなければ、あなたがたが信じたことは無駄になってしまいます。

(1) パウロは、福音の内容を確認する。

①これは新しい教えではなく、すでに知っていることの確認である。

②これは、パウロが伝えた福音である。

③コリントの信者たちはこれを受け入れ、その結果、救われた。

(2) パウロが伝えた福音には、復活という要素が含まれている。

①もし復活が事実でないなら、福音は福音でなくなる。

②欠陥のある福音を信じても、それは無駄になってしまう。

③それゆえ、偽りに惑わされないで、パウロから聞いた福音に立つべきである。

2. 3〜4 節

1Co 15:3 私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書に書いてあるとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、

1Co 15:4 また、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと、

(1) パウロは神から福音に関する啓示を受けた。

①それを最も大切なこととしてコリントの信者たちに伝えた。

②それは聖書（旧約聖書）に書いてあるとおりの内容である。

(2) 啓示の内容は 3 項目ある。

①キリストは、私たちの罪のために死なれた。

＊キリストの死は、自分の罪を贖うためではなかった。

＊キリストの死は、殉教の死でもなかった。

＊キリストの死は、私たちの罪の代価を支払うためであった。

＊イザ 53：5〜6

②また、葬られた。

＊キリストが肉的死を経験したことを示している。

＊キリストの遺体は、丁寧に埋葬された。

＊イザ 53：9

③三日目によみがえられた。

＊多数の目撃者たちがいる。

＊詩 16：9〜10

(3) この 3 項目を私たちは「福音の三要素」と呼んでいる。

①これを受け入れ、キリストに信頼を置いた人は救われる。

Ⅱ．復活の目撃者（5〜7 節）

1．5〜7 節

1Co 15:5 また、ケファに現れ、それから十二弟子に現れたことです。

1Co 15:6 その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中にはすでに眠った人も何人かいますが、大多数は今なお生き残っています。

1Co 15:7 その後、キリストはヤコブに現れ、それからすべての使徒たちに現れました。

(1) 5〜7 節では、復活の目撃者がリストアップされる。

①ケファ（ペテロ）

＊キリストは、3 度もご自身を否んだペテロに最初に現れた。

＊これは、キリストの恵み深さの現れである。

＊これは、ペテロの優位性の現れである。

②12 弟子

＊イスカリオテのユダは死んでいた。

＊12 弟子ということばは、使徒集団を指すことばである。

③500 人以上の兄弟たち

＊これは、ガリラヤで起こった出来事である。

＊500 人の目撃者の大多数は、今なお生き残っている。

＊キリストの復活を疑うなら、彼らに質問すればよい。

④ヤコブ

＊これは、主イエスの弟ヤコブである。

＊彼は未信者の状態で復活のイエスに出会い、信者になった。

＊後に、エルサレム教会の監督となった（使 15：13）。

⑤すべての使徒たち

＊12 使徒は第 1 グループの使徒たちである。

＊それ以外に、第 2 グループの使徒たちがいた。

＊使徒の資格は、復活のイエスに出会っていることである。

Ⅲ．パウロの体験（8〜10 節）

1．8〜9 節

1Co 15:8 そして最後に、月足らずで生まれた者のような私にも現れてくださいました。

1Co 15:9 私は使徒の中では最も小さい者であり、神の教会を迫害したのですから、使徒と呼ばれるに値しない者です。

(1) リストの 6 番目はパウロである。

①パウロは、最後に使徒となった。

②パウロは、復活のキリストに出会った（使 9：3〜6)。

(2) パウロの自己認識

①「月足らずで生まれた者のような私」

＊公生涯の期間、イエスと生活をともにすることはなかった。

②「使徒の中では最も小さい者」

③「使徒と呼ばれるに値しない者」

＊神の教会を迫害した。

3．10 節

1Co 15:10 ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは無駄にはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。

(1) パウロが今あるのは、神の恵みによる。

①多く赦された者は、多く愛する。

②多くの恵みを受けた者は、多くの奉仕をする。

(2) パウロが受けた神の恵みは、無駄にはならなかった。

①パウロは、ほかのすべての使徒たちよりも多く働いた。

②それは事実であるが、自慢にならないように、補足説明をする。

③パウロとともにあった神の恵みが働いたのである。

Ⅳ．まとめ（11 節）

1．11 節

1Co 15:11 とにかく、私にせよ、ほかの人たちにせよ、私たちはこのように宣べ伝えているのであり、あなたがたはこのように信じたのです。

(1) 使徒たちは、福音理解においては一致している。

①特に、キリストの復活は歴史的事実であるという点で一致している。

（2）どの使徒から福音を聞いたかは、問題ではない。

①コリントの信者たちは、唯一の福音を聞いたのである。

②そして、福音を信じたことにより、救われたのである。

結論：福音の信頼性

1. 旧約聖書の裏付けがある。

（1）キリストは、私たちの罪のために死なれた。

①イザ 53：5〜6

Isa 53:5 しかし、彼は私たちの背きのために刺され、／私たちの咎のために砕かれたのだ。／彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、／その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。

Isa 53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、／それぞれ自分勝手な道に向かって行った。／しかし、【主】は私たちすべての者の咎を／彼に負わせた。

（2）また、葬られた。

①イザ 53：9

Isa 53:9 彼の墓は、悪者どもとともに、／富む者とともに、その死の時に設けられた。／彼は不法を働かず、／その口に欺きはなかったが。

（3）三日目によみがえられた。

①詩 16：9〜10

Psa 16:9 それゆえ　私の心は喜び／私の胸は喜びにあふれます。／私の身も安らかに住まいます。

Psa 16:10 あなたは　私のたましいをよみに捨て置かず／あなたにある敬虔な者に／滅びをお見せにならないからです。

2. 目撃者が多数存在している。

（1）6 つのグループがリストアップされていた。

（2）12 使徒たちは、福音のために命を捨てた。

3. 理屈に合っている。

（1）複数の独立した証人がいる。

（2）彼らの証言は、その出来事からさほどの時間を経ずに記録された。

（3）複数の反対者たちがいる。

コリント人への手紙第一　28 回
復活（2）
―死者の復活―
15：12〜34

はじめに

1. 文脈の確認
   - (1) 結婚に関する教え（7：1〜40）
   - (2) 偶像に献げられた肉（8：1〜11：1）
   - (3) 女のかぶり物（11：2〜16）
   - (4) 聖餐式（11：17〜34）
   - (5) 御霊の賜物（12〜14）
   - (6) 死者の復活（15）
     - ①キリストの復活（1〜11 節）
     - ②死者の復活（12〜34 節）
     - ③からだの復活（35〜49 節）
     - ④奥義（50〜58 節）

2. 注目すべき点
   - (1) 復活に関する質問は、コリント教会からの手紙にはなかった。
   - (2) しかしパウロは、このテーマを取り上げる必要性を感じていた。
   - (3) パウロがいなくなった後に、偽教師が侵入して来た。
     - ①ある者たちは、死後のいのちは信じたが、肉体の復活は否定した。
     - ②また、パウロの使徒としての権威を疑問視する者も出て来た。
   - (4) パウロは、復活がキリスト教信仰の土台であることを教える。

3. アウトライン―死者の復活―
   - (1) 復活の否定（12〜19 節）
   - (2) 歴史的事実（20〜28 節）
   - (3) 信者の苦闘（29〜34 節）

4. 結論：復活がもたらした祝福

死者の復活について学ぶ。

Ⅰ．復活の否定（12〜19 節）

1. 12節

1Co 15:12 ところで、キリストは死者の中からよみがえられたと宣べ伝えられているのに、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はないと言う人たちがいるのですか。

(1) キリストの復活は、歴史的事実である。

①使徒たちはそれを宣べ伝え、コリントの信者たちは、それを信じて救われた。

②しかし、コリントの信者の中には、死者の復活はないと言う人たちがいた。

③キリストの復活を信じながら死者の復活を否定するのは、矛盾である。

(2) ギリシア人の死生観

①死によって魂は肉体から解き放たれる。

②死後、魂だけが生き続ける。

2. 13〜14節

1Co 15:13 もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかったでしょう。

1Co 15:14 そして、キリストがよみがえらなかったとしたら、私たちの宣教は空しく、あなたがたの信仰も空しいものとなります。

(1) 死者の復活がないとしたら、キリストの復活もなかったことになる。

①これは当然の論理的帰結である。

(2) キリストの復活がなかったら、使徒たちの宣教は空しいものとなる。

①キリストは復活を預言していた。

＊復活がないなら、それは嘘か思い込みである。

②復活によって、キリストの死が有効なものであることが証明された。

＊もし復活がないなら、その証明が成り立たなくなる。

(3) コリントの信者たちの信仰も空しいものとなる。

①使徒たちが伝えている福音が偽りであるなら、それを信じることに意味はない。

3. 15節

1Co 15:15 私たちは神についての偽証人ということにさえなります。なぜなら、かりに死者がよみがえらないとしたら、神はキリストをよみがえらせなかったはずなのに、私たちは神がキリストをよみがえらせたと言って、神に逆らう証言をしたことになるからです。

(1) キリストが復活しなかった場合の問題点

①使徒たちは、神についての偽証人ということになる。

②神が復活させなかったのに、復活させたと言うのは、神に逆らう証言である。

4. 16〜18 節

1Co 15:16 もし死者がよみがえらないとしたら、キリストもよみがえらなかったでしょう。
1Co 15:17 そして、もしキリストがよみがえらなかったとしたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます。
1Co 15:18 そうだとしたら、キリストにあって眠った者たちは、滅んでしまったことになります。

(1) もし死者の復活がないなら、キリストの復活もない。
①しかし、キリストは復活されたのだから、死者の復活もある。

(2) キリストの復活を否定すると悲惨な結果になる。
①コリントの信者たちの信仰は無力なものとなる。
②彼らは、今もなお自分の罪の中にいることになる。
③すでに死んだ信者たちは、滅んでしまったことになる。
＊「眠る」という表現は、信者に対して用いられるものである。
＊「滅びてしまう」とは、救いを逃したという意味である。

5. 19 節

1Co 15:19 もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です。

(1) 復活がないなら、信者は哀れな者となる。
①彼らは、キリストに望みを抱きながら地上生涯を送っている。
②彼らは、嘘に騙されて生きている。
③彼らは、誤った希望のために日々労苦している。
④彼らは、すべての人の中で一番哀れな者である。

Ⅱ．歴史的事実（20〜28 節）

1. 20 節

1Co 15:20 しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。

(1)「しかし、今や」は、「ヌニ　デ」という強調形である。
①キリストの復活は、歴史的事実である。
②キリストの復活は、初穂としての復活である。
＊キリストの復活に続く信者の復活がある。

2. 21〜22節

1Co 15:21 死が一人の人を通して来たのですから、死者の復活も一人の人を通して来るのです。

1Co 15:22 アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストにあってすべての人が生かされるのです。

(1) アダムとキリストの対比

①両者はともに人類の代表として行動している。

②彼らの行為の結果は、全人類に及ぶ。

(2) アダムの行為の結果

①死はアダムを通して来た。

②アダムにあってすべての人が死んでいる。

(3) キリストの行為の結果

①死者の復活は人間イエスを通して来る。

②キリストにあってすべての人が生かされる。

＊これは、普遍的救いを教えているのではない。

＊「キリストにあって」とは、信者を指すことばである。

3. 23節

1Co 15:23 しかし、それぞれに順序があります。まず初穂であるキリスト、次にその来臨のときにキリストに属している人たちです。

(1) 復活の順番

①初穂であるキリスト

＊蘇生した人たちはいるが、彼らは死んだ。

②来臨のときにキリストに属している人たち

＊携挙のときに、信者の復活がある。

＊キリストに属している人たちとは、教会時代の聖徒たちである。

＊患難期の殉教者たちや旧約時代の聖徒たちは、再臨のときに復活する。

4. 24〜26節

1Co 15:24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、王国を父である神に渡されます。

1Co 15:25 すべての敵をその足の下に置くまで、キリストは王として治めることになっているからです。

1Co 15:26 最後の敵として滅ぼされるのは、死です。

(1)「それから終わりが来ます」

①現在の天と地は滅び、千年王国が設立される。

②千年王国の終りに、あらゆる支配、権威、権力は滅ぼされる。

③悪魔は裁かれ、火の池に投げ込まれる（黙 20：7〜10)。

④不信者の復活がある。

＊彼らは、白い御座の裁きで裁かれ、火の池に投げ込まれる（第 2 の死)。

⑤キリストは、王国を父なる神に渡される。

(2)「最後の敵として滅ぼされるのは、死です」

①死が擬人法で語られている。

②千年王国でも死ぬ人はいたが、これ以降、死ぬ人はいなくなる。

5. 27〜28 節

1Co 15:27 「神は万物をその方の足の下に従わせた」のです。しかし、万物が従わせられたと言うとき、そこには万物をキリストに従わせた方が含まれていないことは明らかです。

1Co 15:28 そして、万物が御子に従うとき、御子自身も、万物をご自分に従わせてくださった方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。

(1) それから、父なる神が栄光をお受けになる。

①詩 8：7 からの引用

②パウロは、この聖句はキリストにあって成就したと見ている。

③父なる神は、キリストを王として立てた。

④キリストは、御国を完全な状態に回復し、父なる神に渡される。

⑤父なる神が、すべてにおいてすべてとなられるためである。

Ⅲ. 信者の苦闘（29〜34 節）

1. 29 節

1Co 15:29 そうでなかったら、死者のためにバプテスマを受ける人たちは、何をしようとしているのですか。死者が決してよみがえらないのなら、その人たちは、なぜ死者のためにバプテスマを受けるのですか。

(1) 難解な聖句である。

①恐らく、異教徒が実施していた習慣であろう。

②あるいは、バプテスマを受ける前に死んだ信者のための代理洗礼かもしれない。

（ILL）モルモン教の代理洗礼

③パウロは、死者のためのバプテスマを肯定も否定もしていない。

④死者のためのバプテスマは、死者が復活しないなら、無意味な行為である。

2. 30〜32節

1Co 15:30 なぜ私たちも、絶えず危険にさらされているのでしょうか。

1Co 15:31 兄弟たち。私たちの主キリスト・イエスにあって私が抱いている、あなたがたについての誇りにかけて言いますが、私は日々死んでいるのです。

1Co 15:32 もし私が人間の考えからエペソで獣と戦ったのなら、何の得があったでしょう。もし死者がよみがえらないのなら、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」ということになります。

(1) 死者が復活しないなら、地上生涯における格闘は、無意味なものとなる。

①パウロは、キリストを伝えたために、常にいのちの危険にさらされている。

②もし復活がないなら、すぐに宣教活動を止めたほうがよい。

③しかし、復活は実際にあるから、危険を冒してでも宣教する。

(2) パウロがコリントの信者たちを誇りとしていたことは、確かである。

①それを同じ確かさをもって言うが、パウロは日々死んでいる。

②パウロは、エペソで獣と戦った。

＊ローマ市民が獣と戦うことはないので、獣とは、比ゆ的ことばである。

③もし復活がないなら、なんの意味もなかったことになる。

④もし復活がないなら、世の人たちの人生哲学を選んだほうがましである。

3. 33〜34節

1Co 15:33 惑わされてはいけません。「悪い交際は良い習慣を損なう」のです。

1Co 15:34 目を覚まして正しい生活を送り、罪を犯さないようにしなさい。神について無知な人たちがいます。私はあなたがたを恥じ入らせるために言っているのです。

(1) 偽教師に惑わされてはならない。

①彼らと交わるのは、悪い交際である。

②偽教師と交際すると、健全な信仰が損なわれる。

(2) コリントの信者たちへの勧告

①正しい生活に専念し、罪から離れなさい。

②神について無知な人たちに気をつけなさい。

＊教会の中にいる不信者

＊偽教師たち

結論：復活がもたらした祝福

1. イエスの信頼性が証明された。
   （1）イエスは、預言者であり、【主】（ヤハウェ）であることが証明された。
2. 福音の信頼性が証明された。
   （1）もし復活がないなら、私たちの信仰はむなしい。

3．復活後の働きが可能になった。
   （1）イエスは大祭司、仲介者、教会のかしらである。
   （2）弟子たちに権威と聖霊と命令を与えた。
   （3）私たちの内に内住されるお方である。

4．ダビデ契約が成就した。
   （1）ダビデの子孫が永遠の王位に就く。
   （2）2サム7：12〜16

5．復活の体が初めて登場した。
   （1）それまでの復活は、厳密には蘇生であった。
   （2）イエスの復活は、地上での体との連続性があった。
   （3）これが、私たちが将来目撃するメシアの姿である。

6．信者の復活の初穂となった。
   （1）後に続くものがあるから、「初穂」と言う。
   （2）私たちは、栄光のからだをいただくようになる。

コリント人への手紙第一　29 回
復活（3）
―からだの復活―
15：35～49

はじめに

1. 文脈の確認
   - (1) 結婚に関する教え（7：1～40）
   - (2) 偶像に献げられた肉（8：1～11：1）
   - (3) 女のかぶり物（11：2～16）
   - (4) 聖餐式（11：17～34）
   - (5) 御霊の賜物（12～14）
   - (6) 死者の復活（15）
     - ①キリストの復活（1～11 節）
     - ②死者の復活（12～34 節）
     - ③からだの復活（35～49 節）
     - ④奥義（50～58 節）

2. 注目すべき点
   - (1) 復活に関する質問は、コリント教会からの手紙にはなかった。
   - (2) しかしパウロは、このテーマを取り上げる必要性を感じていた。
   - (3) パウロがいなくなった後に、偽教師が侵入して来た。
     - ①ある者たちは、死後のいのちは信じたが、肉体の復活は否定した。
     - ②また、パウロの使徒としての権威を疑問視する者も出て来た。
   - (4) パウロは、復活がキリスト教信仰の土台であることを教える。

3. アウトライン―からだの復活―
   - (1) 自然界が教えていること（35～44 節）
   - (2) 聖書が教えていること（45～49 節）

4. 結論

からだの復活について学ぶ。

Ⅰ．自然界が教えていること（35～44 節）

Ⅰ．35 節

1Co 15:35 しかし、「死者はどのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか」と言う人がいるでしょう。

(1) コリントの信者たちの質問

①HOW（どのようにして）

②WHAT（どのようなからだで）

③現代人も同じ疑問を持っている。

＊私自身も、死後の世界を信じていなかった。

＊霊界の存在を信じている人でも、からだのよみがえりは信じていない。

(2) コリントの信者たちは、ギリシア哲学の影響を受けていた。

①死者のからだは朽ちるので、再生することは不可能である。

②人間存在の本質は、魂である。

③からだは、魂を包んでいる殻である。

④死ぬと、魂は束縛から解放される。

⑤御霊の賜物（異言）は、霊的状態に入ったことを示している。

⑥後は、からだという束縛からの解放が待っているだけである。

(3) パウロは、からだのヘブル的理解を提示する。

①聖書は、からだも含めた物質世界を高く評価している。

②復活は、単なる死体の再生ではない。

③復活は、栄光のからだによみがえることである。

2. 36節

1Co 15:36 愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ生かされません。

(1) HOWの質問への答え

①「愚かな人だ」は、修辞的侮辱である。

＊愚かな質問をする人、不道徳な反論をする人は、「愚かな人」である。

②パウロは、種蒔きを例に取って、説明する。

③種は、一度死んでからでないと、芽を出し、育ち、実をつけることはない。

④これは、私たちが日常的に目撃している神秘である。

⑤からだの復活も、それと同じである。

3. 37～38節

1Co 15:37 また、あなたが蒔くものは、後にできるからだではなく、麦であれ、そのほかの穀物であれ、ただの種粒です。

1Co 15:38 しかし神は、みこころのままに、それにからだを与え、それぞれの種にそれ自身のからだをお与えになります。

(1) WHATの質問への答え

①人が地に蒔くのは、麦や大麦などの種粒である。

②そこから育つのは、元の種とは異なる植物である。

③しかし、種と植物の間には連続性がある。

＊種と植物は異なるが、連続性がある。

④地上のからだと復活のからだの間にも、連続性がある。

＊復活のからだを見ると、それが誰であるか分かる。

(2) 種の中にある情報で、植物の形状、色、サイズ、花などが決まる。

①神は、御心のままに、それぞれの種に特徴を与えた。

4. 39～41節

1Co 15:39 どんな肉も同じではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉、それぞれ違います。

1Co 15:40 また、天上のからだもあり、地上のからだもあり、天上のからだの輝きと地上のからだの輝きは異なり、

1Co 15:41 太陽の輝き、月の輝き、星の輝き、それぞれ違います。星と星の間でも輝きが違います。

(1) 次に、地上のからだと復活のからだが異なったものであることを証明する。

①肉にはさまざまなものがある（人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉）。

②それゆえ、からだに天上のからだと地上のからだがあるのは、不思議ではない。

③さらに言えば、天上のからだの輝きと地上のからだの輝きは異なる。

(2) 天上のからだの輝きと地上のからだの輝きが異なることを証明する。

①天体を例に取って説明する。

②太陽の輝き、月の輝き、星の輝きなどは、それぞれ違う。

＊太陽は月よりも輝いている。

＊星と星の間でも輝きが違う。

5. 42～44節

1Co 15:42 死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらされ、

1Co 15:43 卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらされ、弱いもので蒔かれ、力ある

ものによみがえらされ、

1Co 15:44 血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。

(1) 地上のからだよりも復活のからだのほうが輝いている。

①朽ちるもので蒔かれる。朽ちないものによみがえらされる。

＊地上のからだは病と死によって朽ちるが、復活のからだはそうではない。

②卑しいもので蒔かれる。栄光あるものによみがえらされる。

＊死体にはなんの輝きもないが、復活のからだは栄光に輝く。

③弱いもので蒔かれる。力あるものによみがえらされる。

＊老化現象や病で、からだは弱くなる。復活のからだは力に満ちる。

④血肉のからだで蒔かれる。御霊に属するからだによみがえらされる。

＊血肉のからだとは、地上生涯に適したからだである。

・蒔かれるとは、死ぬことである。

＊御霊に属するからだとは、天上の生活に適したからだである。

・終末論的からだ。コリントの信者たちは、その域に達していない。

Ⅱ．聖書が教えていること（45～49 節）

1．45 節

1Co 15:45 こう書かれています。「最初の人アダムは生きるものとなった。」しかし、最後のアダムはいのちを与える御霊となりました。

(1) 最初のアダムは、神の息によって生きるものとなった。

①創 2：7

Gen 2:7 神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。

②アダムは神によっていのちを与えられた。

③地上で生きる人はすべて、最初のアダムの特徴を持って生まれて来る。

(2) 最後のアダムは、永遠のいのちを与えるお方となった。

①「最後のアダムは命を与える霊となりました」（共同訳）

②キリストは復活により、霊的からだを持つようになられた。

③その結果、信じる者に永遠のいのちを与える方となられた。

④キリストを信じる者は、キリストの特徴を身につけるようになる。

⑤また信者は、復活のときに霊的からだを持つようになる。

2．46 節

1Co 15:46 最初にあったのは、御霊のものではなく血肉のものです。御霊のものは後に来るのです。

(1) 被造世界の普遍的法則が確認される。

①先ず血肉のもの、次に御霊のものがくる。

＊例としては、アダムが先におり、次に霊的人であるイエスが来られた。

＊人は、血肉をもって生まれて来るが、新生によって霊的人とされる。

3. 47～48 節

1Co 15:47 第一の人は地から出て、土で造られた人ですが、第二の人は天から出た方です。
1Co 15:48 土で造られた者たちはみな、この土で造られた人に似ており、天に属する者たちはみな、この天に属する方に似ています。

(1) 被造世界の普遍的法則の確認が続く。

①第一の人（アダム）は地から出て、土で造られた。

＊アダムから出た者たちはみな、アダムに似ている。

②第二の人（キリスト）は天から出た方である。

＊キリストにあって新生した者たちはみな、キリストに似ている。

4. 49 節

1Co 15:49 私たちは、土で造られた人のかたちを持っていたように、天に属する方のかたちも持つことになるのです。

(1) 地上生涯を生きている間の私たちの姿

①アダムから生まれた者は、アダムの特徴を持っている。

(2) 復活したときの私たちの姿

①私たちは、キリストのかたちを持つようになる。

②これは将来起こることである。

③それが成就するための条件は、復活のからだを持つことである。

結論

1. 死体が消滅した人の復活

(1) 火葬された死体

(2) 検体された死体

(3) 海で遭難した死体

(4) ラビたちの回答

①破壊されない首の骨があり、そこから死者は復活する。

(5) パウロの回答

①からだは破壊されても、古いからだのパターンは残る。それが種となる。

2. 復活のタイミング

(1) 携挙のとき

①生きている聖徒たちは、一瞬のうちに変えられる。

②すでに死んでいる聖徒たちは、朽ちないものによみがえる。

③これは、教会時代の聖徒たちに関することである。

(2) 再臨のとき

①旧約時代の聖徒たち

②患難期の殉教者たち

3. 人生の目的

(1) 血肉のからだで生まれる。

(2) 死を経て、御霊に属するからだによみがえる。

(3) 栄光のからだを持って、永遠に神とともに生きる。

コリント人への手紙第一　30 回
復活（4）
―奥義―
15：50〜58

はじめに

1. 文脈の確認
   - (1) 結婚に関する教え（7：1〜40）
   - (2) 偶像に献げられた肉（8：1〜11：1）
   - (3) 女のかぶり物（11：2〜16）
   - (4) 聖餐式（11：17〜34）
   - (5) 御霊の賜物（12〜14）
   - (6) 死者の復活（15）
     - ①キリストの復活（1〜11 節）
     - ②死者の復活（12〜34 節）
     - ③からだの復活（35〜49 節）
     - ④奥義（50〜58 節）

2. 注目すべき点
   - (1) 復活に関する質問は、コリント教会からの手紙にはなかった。
   - (2) しかしパウロは、このテーマを取り上げる必要性を感じていた。
   - (3) パウロがいなくなった後に、偽教師が侵入して来た。
   - (4) コリントの信者たちは、ギリシア哲学の影響を受けていた。
     - ①死後のいのちは信じるが、肉体の復活は信じないと言う者たちがいた。
     - ②パウロの使徒としての権威を疑問視する者たちもいた。
   - (5) そこでパウロは、復活がキリスト教信仰の土台であることを教える。

3. アウトライン―奥義―
   - (1) 新しいテーマの紹介（50 節）
   - (2) 奥義の啓示（51〜57 節）
   - (3) 奥義の適用（58 節）

4. 結論：4 つの復活

復活に関する奥義について学ぶ。

2024年6月16日（日）　1コリ15：50～58　復活（4）

Ⅰ．新しいテーマの紹介（50節）

1．50節

1Co 15:50 兄弟たち、私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

(1)「兄弟たち、私はこのことを言っておきます」

①ここから新しいテーマに入る。

②パウロは、読者の注意を喚起している。

③新しいテーマとは、生きている人の造り変え（transformation）である。

(2) からだの造り変えが必要な理由

①血肉のからだは、地上で生きるために適したからだである。

＊そのからだは、神の国（永遠の御国）で生きるために適していない。

②朽ちるもの（血肉のからだ）は、朽ちないもの（神の国）を相続できない。

③では、生きている人は、どうすれば神の国で生きるようになるのか。

＊パウロは、この問いに奥義をもって答える。

Ⅱ．奥義の啓示（51～57節）

1．51～52節

1Co 15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

1Co 15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

(1) 奥義とは

①かつては隠されていた真理

②使徒たちに啓示された真理

③使徒たちを通して私たちに知らされた真理

(2) ここでの奥義とは、生きている信者の造り変えである。

①全員が眠る（死ぬ）わけではない。

②死んだ信者は、復活する。

③復活は、旧約聖書に預言されていたので、奥義ではない。

④生きている信者の造り変えが奥義である。

⑤最終的には、死んだ信者も生きている信者も、みな変えられる。

(3) 造り替えが起こるタイミングは、携挙である。

①「終わりのラッパとともに」

＊患難期後携挙説は、これを黙示録の第 7 のラッパと解釈する。

＊しかし、コリントの信者たちは第 7 のラッパを知らない。

＊1 テサ 4：16

1Th 4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

②「たちまち、一瞬のうちに変えられます」

＊人間には想像もできないような奇跡が起こる。

③「死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです」

＊すでに死んでいる信者は、栄光のからだに復活する。

＊生きている信者は、変えられる。

2. 53 節

1Co 15:53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。

(1) 前半は、死んだ信者への言及である。

①「この朽ちるべきもの」とは、からだが地のちりに戻った者たちのことである。

②彼らは、復活によって朽ちないからだを得るようになる。

(2) 後半は、生きている信者への言及である。

①「この死ぬべきもの」とは、今は生きているがやがて死ぬ者である。

②彼らは、死を経ずして栄光のからだに変えられる。

3. 54～55 節

1Co 15:54 そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。／「死は勝利に呑み込まれた。」

1Co 15:55 「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。／死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」

(1) 死者の復活と生きている者の作り変えによって、預言が成就する。

①「死は勝利に呑み込まれた」

②イザ 25：8

Isa 25:8 永久に死を呑み込まれる。／【神】である主は、すべての顔から涙をぬぐい取り、／全地の上からご自分の民の恥辱を取り除かれる。／【主】がそう語られたのだ。

(2)「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこに……」

①パウロは、ホセ 13：14 に若干の変更を加えて引用する。

Hos 13:14 わたしはよみの力から彼らを贖い出し、／死から彼らを贖う。／死よ、おまえのとげはどこにあるのか。／よみよ、おまえの針はどこにあるのか。／あわれみはわたしの目から隠されている。

②この歌は、空中で主と会う信者たちが歌うものである。

③死が擬人法で表現されている。

④信者たちは、あれほど恐れた死を嘲るようになる。

4. 56～57 節

1Co 15:56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。

1Co 15:57 しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

(1) この部分は、本来の文脈から離れた議論である。

①死をもたらすとげは、罪である。

＊罪が人に死をもたらしたということである。

②人に罪を意識させるのは、律法である。

＊律法が人を罪に定めるということである。

(2)「しかし、神に感謝します」

①最後のアダムは、律法の要求をすべて満たしてくださった。

②最後のアダムは、贖罪の死を遂げてくださった。

③私たちは、主イエス・キリストにあって勝利を与えられた。

Ⅲ. 奥義の適用（58 節）

1. 58 節

1Co 15:58 ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄でないことを知っているのですから。

(1)「ですから」

①キリストの復活は事実である。

②死者の復活は確実に起こる。

③キリストを信じる者は、滅びから救われている。

④復活という真理は、私たちの生き方を変える。

（2）適用

①堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励む。

＊堅く立つとは、福音の真理に立つことである。

②自分たちの労苦が無駄でないことを知っている。

＊主にあって

③終末論は、常に現在の生活への適用を持っている。

＊終末論を学ぶ理由は、今という時をより忠実に生きるためである。

結論：4 つの復活

1. イエスの復活

（1）イエスは、十字架上で死に、3 日目に復活された。

（2）復活のからだは、栄光のからだであった。

（3）弟子たちは、イエスの復活を命懸けで証言した。

（4）イエスの復活は、初穂としての復活であった。

（5）それ以前の復活は、すべて蘇生であった。

2. 教会時代の聖徒たちの復活

（1）教会時代の聖徒たちの復活は、携挙の時に起こる。

（2）復活した者たちは、キリストの御座の裁きで、報奨のための裁きを受ける。

（3）その裁きに基づいて、千年王国での責務が決まる。

3. 旧約時代の聖徒たちと患難期の聖徒たちの復活

（1）彼らの復活は、キリストの再臨の後で起こる。

（2）患難期と千年王国の間の 75 日の間に起こる。

（3）彼らも報奨のための裁きを受けるが、その裁きの名称は不明である。

（4）その裁きに基づいて、千年王国での責務が決まる。

4. 罪人の復活

（1）第 1 の復活と第 2 の復活には、千年間の隔たりがある。

（2）千年王国が終わると、第 2 の復活が起こる。

（3）あらゆる時代の罪人たちが復活する。

（4）彼らは、白い御座の裁きで裁かれ、火の池に投げ込まれる（黙 20：15）。

（5）これが第 2 の死である。

コリント人への手紙第一　31 回
エルサレム教会への献金
16：1〜12

はじめに

1. 文脈の確認
   - (1) 結婚に関する教え（7：1〜40）
   - (2) 偶像に献げられた肉（8：1〜11：1）
   - (3) 女のかぶり物（11：2〜16）
   - (4) 聖餐式（11：17〜34）
   - (5) 御霊の賜物（12〜14）
   - (6) 死者の復活（15）
   - (7) エルサレム教会への献金（16：1〜12）

2. 注目すべき点
   - (1) パウロは、エルサレム教会への献金を取り上げる必要性を感じていた。
   - (2) この手紙の中では、最も穏やかな勧めになっている。
   - (3) このテーマに関して混乱があったことは、2 コリで明らかになる。
   - (4) 私たちは、献金に関する教訓を学ぶことができる。

3. アウトライン―エルサレム教会への献金―
   - (1) 献金を集める方法（1〜4 節）
   - (2) 旅の計画（5〜12 節）

4. 結論：新約聖書が教える献金

エルサレム教会への献金について学ぶ。

Ⅰ．献金を集める方法（1〜4 節）

1. 1 節

1Co 16:1　さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたとおりに、あなたがたも行いなさい。

(1)「ペリ　デ」（さて、〇〇については）

①ここから献金という新しいテーマに入る。

(2) コリントの信者たちは、パウロが献金を集めていることを聞いていた。

①ヤコブ、ペテロ、ヨハネは、エルサレムの貧しい人たちを覚えるように勧めた。

②ガラ 2：9〜10

Gal 2:9 そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケファとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し出しました。それは、私たちが異邦人のところに行き、彼らが割礼を受けている人々のところに行くためでした。

Gal 2:10 ただ、私たちが貧しい人たちのことを心に留めるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めてきました。

(3) エルサレム教会が貧しかった理由

①大飢饉が襲ってきた。

②初代教会の信者たちは、社会的・宗教的制裁を受けていた。

(4) パウロがガラテヤの諸教会に献金を勧めたという記録は残っていない。

①パウロは、ガラテヤ地方を通過する際に、諸教会を訪問した。

②パウロの旅

＊ピシディアのアンティオキア、イコニオン、リステラ、デルベ

＊そして、エペソ

＊パウロは、エペソに滞在しながらこの手紙を書いている。

2. 2 節

1Co 16:2 私がそちらに行ってから献金を集めることがないように、あなたがたはそれぞれ、いつも週の初めの日に、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきなさい。

(1)「週の初めの日」

①今で言う日曜日である。「主の日」ということばはまだない。

②教会誕生直後から、信者たちは週の初めの日に集っていた（復活の記念日）。

③この聖句は、日曜礼拝に言及した最初の箇所である。

④この日は、安息日ではない。

(2) 献金の原則

①一時に多額の出費を負担することのないように、少額を毎週、蓄えておく。

②週の初めの日に蓄える（個人的に蓄えるか、教会に委ねるかは明確ではない）。

③収入に応じて、蓄える（主が祝してくださった量に応じて、献げる）。

④額に関する指示はない。

3. 3 節

1Co 16:3 私がそちらに着いたら、あなたがたの承認を得た人たちに手紙を持たせてエルサレムに派遣し、あなたがたの贈り物を届けさせましょう。

(1) このプロジェクトの透明性を保つ方法

①パウロ自身は、献金をエルサレムに届けるつもりはない。

②パウロは、推薦状を書く。

③各教会から承認を受けた代表たちが、献金と手紙を持ってエルサレムに行く。

④多数の人たちの参加によって、信頼性が担保される。

4. 4 節

1Co 16:4 もし私も行くほうがよければ、その人たちは私と一緒に行くことになるでしょう。

(1) しかし、パウロも行くほうがよければ、代表たちとともに行くことになる。

①この手紙を書いた後で、パウロはエルサレムに行く決心をする。

②ロマ 15：25〜26

Rom 15:25 しかし今は、聖徒たちに奉仕するために、私はエルサレムに行きます。

Rom 15:26 それは、マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために、喜んで援助をすることにしたからです。

Ⅱ．旅の計画（5〜12 節）

1. 5 節

1Co 16:5 私はマケドニアを通って、あなたがたのところへ行きます。マケドニアはただ通過し、

(1) パウロは、近い将来、コリントを訪問しようとしている。

①エペソからマケドニアを通過してコリントに向かう。

②マケドニアは、コリントの北の地域である。

③ピリピ、テサロニケ、ベレアの諸教会を短時間の間、訪問する。

④これらの諸教会も、エルサレム教会のために献金を集めた。

2. 6〜7 節

1Co 16:6 おそらく、あなたがたのところに滞在するでしょう。冬を越すことになるかもしれません。どこに向かうにしても、あなたがたに送り出してもらうためです。

1Co 16:7 私は今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくありません。主がお許しになるなら、あなたがたのところにしばらく滞在したいと願っています。

(1) パウロは、コリントに半年ほど滞在する予定でいる。

①冬を越すことになるかもしれない。

②冬は海が荒れるので、船旅には向かない。

③パウロは、コリント教会の諸問題を解決するために、長期滞在を望んだ。
④パウロは、平安のうちに次の訪問地へと送り出してもらうことを願った。

(2) 結果的に、最初の予定よりも 1 年遅くコリントを訪問することになった。
①この予定変更は、後に物議をかもすことになる（2 コリ 1：15〜2：1)。

2. 8〜9 節

1Co 16:8 しかし、五旬節まではエペソに滞在します。
1Co 16:9 実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれていますが、反対者も大勢いるからです。

(1) パウロは、五旬節まではエペソに滞在する予定でいる。
①五旬節は、5 月末から 6 月初めにやってくる。
②五旬節は、モーセの律法の付与を記念するユダヤ人の祭りである。
③聖霊降臨と教会誕生の記念日でもある。
④ユダヤ人伝道を意識する者が、ユダヤ人の祭りに関心を払うのは当然である。

(2) エペソに滞在する理由が 2 つある。
①実り多い働きをもたらす門が広く開かれている。
②反対者も大勢いる。
＊反対があることは、門が閉ざされているしるしとはならない。

3. 10〜11 節

1Co 16:10 テモテがそちらに行ったら、あなたがたのところで心配なく過ごせるようにしてあげてください。彼も私と同じように、主のみわざに励んでいるのです。
1Co 16:11 だれも彼を軽んじてはいけません。彼を平安のうちに送り出して、私のところに来させてください。私は、彼が兄弟たちと一緒に戻るのを待っています。

(1) 今パウロは、テモテをコリント教会に派遣しようとしている。
①使 19：22（エラストも同行した）

Act 19:22 そこで、自分に仕えている者たちのうちの二人、テモテとエラストをマケドニアに遣わし、自分自身はなおしばらくアジアにとどまっていた。

②パウロは、テモテが心配なく過ごせるようにしてあげて欲しいと願う。
＊コリント教会での奉仕には、困難が伴う。
＊テモテは、パウロよりも臆病な性質を持っている（1 テモ 4：12)。

(2) テモテは、パウロと同じように、忠実に主のわざに励んでいる。

①年が若いからといって、彼を軽んじてはならない。

(3) 最後には、彼を自分のところに送り出してほしい。

①平安のうちに

②「兄弟たち」が誰かは分からない。

＊献金をエルサレム教会に届ける教会の代表たちであろう。

4. 12 節

1Co 16:12 兄弟アポロのことですが、兄弟たちと一緒にあなたがたのところに行くように、私は強く勧めました。けれども、彼は今のところ行く意志は全くありません。しかし、良い機会があれば行くでしょう。

(1)「ペリ　デ」(6 回目)

①コリント教会からの手紙にあった最後の質問

(2) コリントの信者たちは、アポロが訪問してくれることを期待した。

①パウロは、アポロにそうするように強く勧めた。

②しかしアポロは、パウロとともにエペソにとどまることを願った。

③パウロは、アポロを同労者として敬った。

(3) アポロは、神の導きを自分で判断した。

①パウロには、アポロを意のままに動かす権威はない。

②アポロは、今は神の時ではないと判断した。

＊コリント教会にあった分裂が理由か。

③彼は、神の時がきたなら、コリントを訪問しようとしている。

結論：新約聖書が教える献金

1. 代表的な聖句

(1) 2 コリ 8〜9

(2) ロマ 15：26〜27

(3) ピリ 4：10〜19

2. パウロは、什一献金に言及していない。

(1) 什一献金は、モーセの律法の中に含まれる献金の方法である。

(2) この規定は、モーセの律法の下にあるイスラエル人に与えられたものである。

(3) 厳密には、イスラエルの民は収入の 3 分の 1 を神に献げた。

(4) しかし、クリスチャンはモーセの律法の下にはいない。
(5) 使徒たちは、ユダヤ人信者にも異邦人信者にも、什一献金を命じていない。
(6) アブラハムやヤコブは什一を献げている。
①歴史的事実と、それが命じられているかということは、別問題である。

3. 新約時代の聖徒が実行すべき献金
(1) 額に関する強制はない。
(2) 一時に多額の出費をすることがないように、少額を毎週、蓄えておく。
(3) 週の初めの日に蓄える習慣を作る。
(4) 収入に応じて蓄える。
①主が祝してくださった量に応じて献げる。
②喜んで献げる。

コリント人への手紙第一　32 回
結びのことば
16：13〜24

はじめに

1. 文脈の確認
   - (1) イントロダクション（1：1〜9）
   - (2) 教会内の分裂（1：10〜4：21）
   - (3) 教会内の無秩序（5〜6）
   - (4) 結婚に関する教え（7：1〜40）
   - (5) 偶像に献げられた肉（8：1〜11：1）
   - (6) 女のかぶり物（11：2〜16）
   - (7) 聖餐式（11：17〜34）
   - (8) 御霊の賜物（12〜14）
   - (9) 死者の復活（15）
   - (10) エルサレム教会への献金（16：1〜12）
   - (11) 結びのことば（16：13〜24）

2. 注目すべき点
   - (1) この手紙全体から出てくる適用と勧告が語られる。
   - (2) 講解メッセージ＝聖句の解説＋適用
   - (3) パウロ書簡＝教理＋適用

3. アウトライン　―結びのことば―
   - (1) 最後の勧告（13〜18 節）
   - (2) あいさつと祝祷（19〜24 節）

4. 結論：1 コリ 16：22 から学ぶ教訓

結びのことばについて学ぶ。

Ⅰ．最後の勧告（13〜18 節）

1. 13〜14 節

1Co 16:13 目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。雄々しく、強くありなさい。

1Co 16:14 一切のことを、愛をもって行いなさい。

＊この手紙の内容は、５つの勧告でまとめることができる。

(1)「目を覚ましていなさい」

①コリント教会は、霊的に不安定な教会であった。

②内側と外側からくる問題に対して身構える必要がある。

＊この教会では、内側からくる問題のほうが多い。

＊異教の教えの影響を受けないように注意する。

＊偽教師の教えの影響を受けないように注意する。

＊神の御心だけを求めるように注意する。

＊終わりの時代のしるしを見逃さないように注意する。

(2)「堅く信仰に立ちなさい」

①福音の真理に立つ。

②神のことばに立つ。

③キリストに対する信仰に立つ。

(3)（4)「雄々しく、強くありなさい」

①雄々しくとは、子どもの状態にとどまらないで大人になること。

②1 コリ 14：20

1Co 14:20 兄弟たち、考え方において子どもになってはいけません。悪事においては幼子でありなさい。けれども、考え方においては大人になりなさい。

(5)「一切のことを、愛をもって行いなさい」

①コリントの教会が最も必要としていたのは、愛の教えである。

②御霊の賜物は、愛の動機で用いなければならない（13 章)。

2. 15〜16 節

1Co 16:15 兄弟たちよ、あなたがたに勧めます。ご存じのとおり、ステファナの一家はアカイアの初穂であり、聖徒たちのために熱心に奉仕してくれました。

1Co 16:16 あなたがたも、このような人たちに、また、ともに働き、労苦しているすべての人たちに従いなさい。

(1) コリント教会の問題の 1 つは、権威に対する不従順であった。

①パウロは、権威に対する従順を教えるために、ステファナの一家を例に取る。

②この一家は、目立たないが忠実に奉仕をしている。

(2) ステファナの一家

①コリントの町はアカイア州にあった。

②ステファナの一家は、その地域で最初に信者になった。
③彼らは、パウロによって長老に任命されたわけではないが、自発的に奉仕した。
④パウロは、彼らが神の任命を受けている奉仕者であることを認めた。

(3) 他にも、ステファナの一家のように労苦している人たちがいる。
①コリントの信者たちは、このような人たちに従うべきである。
②地位ではなく、忠実な奉仕こそ、教会では評価されるべきである。

3. 17〜18 節

1Co 16:17 ステファナとポルトナトとアカイコが来たので、私は喜んでいます。あなたがたがいない分を、彼らが埋めてくれたからです。
1Co 16:18 彼らは、私の心とあなたがたの心を安らがせてくれました。このような人たちを尊びなさい。

(1) 3 名の兄弟たちが、エペソにいるパウロを訪問した。
①ステファナとポルトナトとアカイコ
②彼らが、コリントからの手紙を届けたのであろう。
＊パウロは、その手紙に書かれていた質問に答えた。
＊当時は、公の書簡以外の私的書簡は、旅人によって運ばれた。
③彼らの訪問によって、パウロの心は大いに慰められた。
④パウロは、コリントの信者たちが、このような人たちを尊ぶことを期待した。

II．あいさつと祝祷（19〜24 節）

1. 19 節

1Co 16:19 アジアの諸教会がよろしくと言っています。アキラとプリスカ、また彼らの家にある教会が、主にあって心から、あなたがたによろしくと言っています。

(1) アジアの諸教会が、パウロとともにあいさつを送っている。
①ローマ帝国のアジア州にある教会のことである。
②黙 2〜3 章にある諸教会であろう。

(2) アキラとプリスカ、また彼らの家にある教会もあいさつを送っている。
①アキラとプリスカは、コリントにいた天幕職人である。
②パウロとともにエペソに移動し、その町にとどまって奉仕を続けた。
③彼らの家には、信者たちが集っていた。
④教会堂は、3 世紀になって登場したものである。
⑤それまでは、家の教会が標準的な形態であった。

2. 20 節

1Co 16:20 すべての兄弟たちが、あなたがたによろしくと言っています。聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい。

(1) すべての兄弟たちが、あいさつを送っている。

①アキラとプリスカの家にある教会以外の兄弟たちであろう。

②あるいは、アジア地区の信者たちをすべて含む集合名詞かもしれない。

③彼らとコリントの信者たちは、キリストにある兄弟同士である。

(2)「聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい」

①「聖なる口づけ」とは、不純な動機から離れた、口づけのことである。

②当時は、口づけは、愛と敬意と一致のしるしとなっていた。

③今でも、この習慣を残している地域がある。

④この習慣は、誤解や誘惑を避けるために、握手に置き換わった。

3. 21 節

1Co 16:21 私パウロが、自分の手であいさつを記します。

(1) パウロは、書記によって口述筆記をした。

①最後に、自分の手でサインするのがパウロの習慣であった。

②手紙の内容がパウロから出たものであることを保証するためである。

(2) これ以降の文章（22〜24 節）も、パウロが直筆で書いたのであろう。

①パウロの感情のほとばしりが見て取れる。

4. 22 節

1Co 16:22 主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。

(1) パウロがのろいを語る理由

①パウロは、偽教師が教会に侵入していることを知っている。

②彼らは、豊富な知識を持っているが、主イエスを愛していない。

③彼らはすでに裁かれているが、最終的な裁きは再臨の時に下る。

(2)「主よ、来てください」

①初期の教会の信仰告白である。

5. 23〜24 節

1Co 16:23 主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。
1Co 16:24 私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたすべてとともにありますように。

(1) パウロは、この手紙を、恵みがあるようにという祝祷で終える。
①この手紙は、恵みで始まり（1：3）、恵みで終わる。

1Co 1:3 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

(2) さらにパウロは、コリントの信者たちへの愛の保証を追加する。
①厳しい勧告は、彼らに対する愛から出たものである。
②パウロに反抗する者や、パウロの権威を疑う者は、恥じるべきである。

結論：1 コリ 16：22 から学ぶ教訓

1Co 16:22 主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。

1.「主を愛さない者はみな、のろわれよ」

(1) ここでは、「agape」ではなく、「phileo」が使用されている。
①このことばは、初期の信者たちが礼拝の中で唱えた祈りである可能性がある。
(2)「のろわれよ」は、アラム語の「anathema」である。
①このことばは、偽教師に向けられた厳しい宣言である。
(3)「主を愛さない者」は、救われていない。
①信者であっても、失敗する。
＊アブラハム、ダビデ、ペテロなど
＊彼らは、恵みによって立ち直ることができた。
②聖書知識に欠ける人でも救われる。
③しかし、主イエスに対する愛がない人は、救われていない。

2.「主よ、来てください」

(1) アラム語の「maranatha」である。
①ギリシア語の手紙の中にアラム語のことばが出てくるのは、どうしてか。
(2) ユダヤ人信者たちが使用していたことばが、異邦人教会に広まった。
①初期の信者たちが持っていた共通の希望は、主の再臨である。
②「maranatha」は、信者の合言葉となっていた。
③異邦人には分からない合言葉で、自らのアイデンティティを確認していた。

(3) 私たちも、このことばでこの手紙の学びを終える。
「主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください」